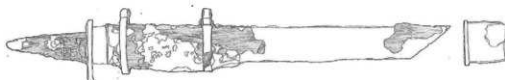


盛岡市内遺跡群

—平成17年度発掘調査報告—

宿 田 遺 跡



2006. 3. 31

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

— 平成17年度発掘調査報告 —

2006. 3. 31

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は本年1月10日に玉山村と合併し、新たな市に生まれ変わりました。市域も北に大きく拡がり、緑豊かな環境と高度都市機能の調和した、拠点都市の形成をめざしております。

盛岡市では文化庁と岩手県教育委員会の指導のもと、個人住宅建設等の開発と埋蔵文化財保護との調整を図りながら、継続して市内遺跡の発掘調査を実施しております。本書は平成17年度に実施した発掘調査の報告書です。学術的な資料として、また郷土の歴史と文化を知る資料として、広くご活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、事業の推進と発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご指導、ご助言を賜りました、文化庁記念物課、岩手県教育委員会生涯学習文化課をはじめ、発掘調査にご協力いただきました、土地所有者の皆様、関係各位に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成18年3月

盛岡市教育委員会

教育長 八巻 恒雄

例 言

1. 本書は、平成17年度に国庫補助事業で実施した「盛岡市内遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書は遺構実測図及び遺物実測図など、多くの資料の提示を意図して作成した。編集と執筆には松川光海、室野秀文があたり、菊地幸裕、三浦陽一、今野公顕、佐々木亮二、齋藤真紀子と協議して編集した。
3. 遺構平面位置は日本測地系（旧測地系）を用い、公共座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。

宿田遺跡	調査座標原点	X - 32,000	Y + 25,300
大館町遺跡	調査座標原点	X - 32,000	Y + 24,500
4. 高さは標高値をそのまま使用している。
5. 土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛している。なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
6. 各遺跡における遺構記号は次のとおりである。

遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
壑穴住居跡	RA	土 坑	RD	溝	RG
建 物 跡	RB	壑 穴	RE	配石・集石	RH
柱 列 跡	RC	焼 土	RF	古 墳	RX

7. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1「盛岡」である。
8. 発掘調査に伴う出土遺物及び調査記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。
9. 調査体制

〔調査主体〕 盛岡市教育委員会

教育長 石川 悌司 八巻 恒雄 (H17年10月11日から)

〔調査総括〕 文化課長 武石 幸久 遺跡の学び館長 三浦 晃
 同 副主幹兼文化財係長 千田 和文 遺跡の学び館長補佐 佐藤 和男

〔調 査〕 文化財主査 室野 秀文 菊地 幸裕 (H18年1月10日から)
 文化財主任 三浦 陽一 文化財主事 今野 公顕、佐々木 亮二
 文化財調査員 松川 光海 齋藤 真紀子

〔発掘調査及び整理作業〕

天沼芳子、泉山紀代子、井上勝子、大宮安子、長内理恵、高橋和男、工藤繁子、工藤淳子、工藤則子、齋藤静子、杉本功、澤野むつ子、谷藤貴子、藤田友子、女鹿麗子、

〔調査協力〕 伊藤 大介、亀井 寿子、佐々木 ウメ、柴田 正義、高橋 弘之、田村 信昭、平山 直道

〔指導・助言〕 文化庁文化財部記念物課、岩手県教育委員会、岩手県埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、中村 英俊、花坂 政博、相原 伸裕（岩手県教育委員会）、赤沼 英男（岩手県立博物館）、手代木 美穂（東北芸術工科大学）、西野 修（矢巾町教育委員会）、宇部 剛保（八戸市教育委員会）伊藤 博幸（奥州市埋蔵文化財センター）、八木 光則、似内 啓邦（盛岡市）井上 雅孝（滝沢村教育委員会）

10. 遺物の表現について

(1) 土器……土器の区分は、縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。

- a 土器の実測図・拓本の縮小率は1/3とした。
- b 挿図の土器の配列は器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
- c 縄文土器で稜線・沈線の実践・破線で表し、陰影は表現していない。
- d 土師器の黒色処理や彩色されたものは、網目（スクリーントーン）で表現した。

(2) 石器

- a 剥片石器の縮小率は1/2、礫石器は1/4とした。
- b 石器の展開順序は、基本的に左側に表面（背面）、中央に右側面、右側に裏面（腹面・主要剥離面）を配列し、必要に応じて側縁・縦断面・横断面を付け加えた。
- c 挿図の配列は器種ごとにまとめ、配列した。
- d 剥片石器の摩擦痕は網目（スクリーントーン）で示し、礫石器の自然面はドットで示した。

(3) 土製品・石製品

- a いずれも縮小率を1/2とした。
- b 挿図の配列は出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめて配列した。

(4) 挿図中の記号番号は遺物の出土地点及び出土層位を表している。

(例) RA701 B層 → RA701 竪穴住居跡埋土B層より出土

(例) G6-A20 A層

↓ ↓ ↓

※1 ※2 ※3

※1 大グリッド……遺跡の全体を50mメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にA・B・C……のアルファベット、北から南には1・2・3……のアラビア数字を付し、A6、C12など、両方の組み合わせでグリッド名を表した。

※2 小グリッド……大グリッドの中をさらに2mメッシュで区切り、北西隅を起点として西から東にA～Yのアルファベット、北から南に1～25のアラビア数字を付し、グリッド名は両方の組合せで表した。

※3 遺物の出土層位を示す。

11. 遺構の表現について

各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は一点鎖線で表し、掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

12. 遺跡範囲については、過去の調査成果と遺跡の地形、遺物の散布状況をもとにして、推定の範囲を表している。

目 次

序 言

例 言

目 次

挿図目次、表目次、分析図表目次、図版目次

I 環 境	1
II 調査経過と事業概要	2
III 宿田遺跡の調査	6
IV 分析-岩手県盛岡市宿田遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果	39

表 目 次

第1表 平成17年度調査一覧	2
第2表 宿田遺跡遺物包含層出土土器集成表	20

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1)	1
第2図 遺跡位置図(2)	3
第3図 宿田遺跡地形図	7
第4図 宿田遺跡第7, 8, 9次調査遺構全体図(1)	8
第5図 宿田遺跡第7, 8, 9次調査遺構全体図(2)	9
第6図 遺物包含層土層断面図	10
第7図 R A 501・502 竪穴住居跡出土遺物	11
第8図 縄文時代の土坑と柱穴(1)	15
第9図 縄文時代の土坑と柱穴(2)	16
第10図 縄文時代の土坑と柱穴土層断面図	17
第11図 R D 033 土坑・Pit17	18
第12図 遺物包含層出土土器	21
第13図 遺物包含層・遺構外出土石器(1)	22
第14図 遺物包含層・遺構外出土石器(2)	23
第15図 R X 0 0 1 古墳	26
第16図 R X 0 0 1 古墳主体部	27
第17図 R X 0 0 1 古墳主体部出土金属製品	28
第18図 R X 0 0 1 古墳・R G 514 溝出土土器・石器	29
第19図 古代の土坑と溝(1)	32
第20図 古代の土坑と溝(2)	33
第21図 古代の土坑・溝土層断面図	34
第22図 第10次調査区と遺構	36
第23図 第10次調査出土遺物	37

分析図表目次

表1	調査資料	42
表2	銜角付肯の分析結果	42
表3	東北地方北部・北海道出土直刀の分析結果	42
図1	№1直刀の外観とX線透過写真像	43
図2	№1直刀の蛍光X線分析結果	43
図3	№1直刀から抽出した試料の組織観察結果	44
図4	№2直刀の外観と抽出した試料のマクロ組織	44
図5	№1・№2に含有されるCu・Ni・Co三成分比	45

図版目次

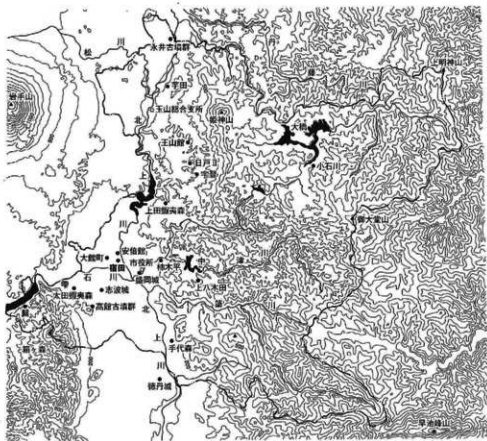
第1図版	第7次～第9次調査区全景
第2図版	RA001・RA002 竪穴住居跡
第3図版	RA002 竪穴住居跡・RD021・025 土坑
第4図版	R0028・029・030 土坑
第5図版	RD036・RD504・506・510 土坑
第6図版	RX001 古墳
第7図版	RX001 古墳
第8図版	RX001 古墳
第9図版	RX001 古墳
第10図版	出土遺物
第11図版	出土遺物

I 環 境

(1) 地形と地質

盛岡市は北上盆地の北部に位置し、東に北上山地、西に奥羽山脈が連なり、市域の西には岩手山 (2,038m)、北東には姫神山 (1,124m) を望む。盆地中央には北上川が南流し、盛岡の市街地中央で西から雫石川、東から中津川が合流する。東方に連なる北上山地は、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および花崗岩からなる。北上山地は中央部の早池峰構造帯により、北部北上山地と南部北上山地に区分されるが、盛岡市の東部は早池峰構造帯の西縁にあたる。

奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山は新規火山地域に含まれ、東は滝沢村柵沢から盛岡市玉山区生出付近にかけて、南東側は盛岡市野川地域にかけて、火山性の堆積物による緩やかな火山性砂台地 (滝沢台地) を形成している。この台地の南辺は奥羽山脈より東流する雫石川の氾濫原に接する。この川は奥羽山脈から流れ出て雫石盆地を形成し、盛岡市北の浦付近の狭窄部を抜けて、北上盆地に勢いよく流れ出る、水量の豊富な川である。



第1図 遺跡位置図 (1) (1:200,000)

(2) 歴史環境

旧石器時代 盛岡市内で旧石器時代の遺跡は、市街地から約11km北東の、玉山区大字敷川外山の小石川遺跡がある。山間部の小河川に臨む台地にあり、後期旧石器時代の遺跡で木葉形尖頭器や石核、剥片、台石などが出土している。また、対岸には細石刃や石核の採集された大橋遺跡が存在する。

縄文時代 滝沢台地南部に立地する大新町遺跡からは、草創期の爪形文土器が出土している。この台地上には縄文時代早期の遺跡が多く分布し、大新町遺跡や館坂遺跡では集落が確認されているほか、大館堤・前九年・宿田遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期の集落は少ないが、市街地東側丘陵地域において、上八木田Ⅰ遺跡、畑跡などで集落が確認されている。縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加し、沖積平野を除く、広い地域に分布する。紫Ⅴ・大館町・柿ノ木平・川日Ⅰ遺跡・湯沢遺跡など、主要河川に望む台地や山麓の扇状地などに大規模な拠点集落が営まれるようになる。

後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落、蔀内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認され、多量の土器や石器類、土製品や石製品、透光器土偶などが出土している。

弥生時代 弥生時代の遺跡数は少ないが、紫Ⅵ遺跡では前期の竪穴住居と中期の再葬墓が確認されており、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡では前期と終末期の竪穴住居跡が確認されている。

古 代 古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で北海道系の形態をもつ土坑墓群が検出されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と古式土師器が共伴し、薬師社脇遺跡では古式土師器が埋納されていた。

古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで大規模な集落が形成される。

平安時代になると、延暦22年(803)に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、雫石川の水害を理由に、812年～813年に徳丹城(矢巾町)へ移転している。その後9世紀中ごろより、陸奥北部の経営は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。大形の建物跡は堰根遺跡や小幡遺跡等でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子がうかがえる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上釜去・猪去館・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面部にも拡がりをみせる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡は少ないが、大新町遺跡や上堂頭遺跡、高松神社裏遺跡では10世紀後半頃の孤立柱建物や竪穴と土器類が出土している。浅岸の堰根遺跡や稲荷町遺跡で12世紀の居館の遺構が確認されている。また、内村遺跡などでは常滑の大甕が出土しているほか、大宮遺跡では大溝から12世紀～13世紀のかわらけが出土している。

中世以後 台太郎遺跡では鎌倉～南北朝期にかけての居館跡が確認されている。市内に数多く分布する中世城館跡の多くは、主に室町時代から戦国時代のもと考えられている。奥羽仕置の後、慶長2・3年(1597・1598)より、南部氏が盛岡城と城下町を建設した。町には奥州街道のほか諸街道が交わり、城下町は今日の盛岡市の基盤となった。

II 調査経過と事業概要

盛岡市では市内の遺跡にかかる個人住宅等の建設にかかる発掘調査や、史跡等の内容確認調査について、国庫補助を受けて調査を進めてきた。本年度の事業期間は平成17年4月18日から平成18年3月31日まで、総事業費は4,480,000円である。

遺跡名	次数	所在地	面積	期間	調査原因等
宿 田	7次	盛岡市前九年一丁目121-2及び同121-5の一部	220㎡	自2005年4月18日 至2005年7月30日	個人住宅
宿 田	8次	盛岡市前九年一丁目121-2他	135㎡	自2005年4月18日 至2005年7月30日	個人住宅
宿 田	9次	盛岡市前九年一丁目121-2	89㎡	自2005年4月18日 至2005年7月30日	個人住宅
宿 田	10次	盛岡市前九年二丁目105-5	143㎡	自2005年4月18日 至2005年5月13日	個人住宅
大館町	77次 補足	盛岡市大新町209-3	570㎡	自2005年11月28日 至2005年12月21日	内容確認調査

表1 平成17年度盛岡市内遺跡群発掘調査一覧

(1) 個人住宅建設に係る調査

試掘調査 平成17年2月15日から2月18日にかけて、個人住宅の建設に係る発掘届が、盛岡市前九年一丁目において3件、前九年二丁目において1件、計4件提出された。4件はすべて宿田遺跡に該当している。同年3月25日、前九年一丁目の住宅建設予定地3件分について、遺構と遺物の有無を確認するための試掘調査を、盛岡市教育委員会文化課が実施した。その結果、各住宅建設予定地から縄文時代から古代にかけての遺構、遺物の存在が確認された。また、前九年二丁目の予定地については、地表観察により縄文時代から弥生時代の遺物の散布があり、遺構、遺物の存在が確認された。そこで各地権者に試掘調査、現地調査の結果と住宅建設前の本発掘調査が必要である旨を報告し、本調査の実施に向けて協議した。また、文化庁、岩手県教育委員会からの指導により、この4件の発掘調査を、平成17年度の盛岡市内遺跡群発掘調査事業（国庫、県費補助事業）として実施する事になった。発掘調査は教育委員会文化課より、遺跡の学び館が調査依頼を受け、平成17年4月18日から着手し、現地調査は同年7月30日に終了している。第7次、8次、9次調査では、縄文時代早期の竪穴住居跡や土坑群、遺物包含層、古墳時代の土坑群、溝、7世紀から8世紀の古墳1基が発見された。

古 墳 古墳は市内厨川地域で初の発見であり、主体部が良好に残り、内部から直刀2振などの副葬品が出土した。調査中7月9日には、古墳を中心に報道関係記者発表と、市民を対象にした現地説明会を開催した。説明会には地権者、地元町内会をはじめ、約60名の参加があった。また、第10次調査では、縄文時代早期の土坑1基と遺物包含層、弥生時代後期の土器の散布が確認されている。第7次、第8次調査の古墳から出土した直刀は、現場で土ごと取り上げた後、室内で土と外側の錆を除去し、製品の形状を確認、実測の後、岩手県立博物館に委託して保存処理を行っている。遺物の取り上げから土や錆の除去方法、注意点については、東北芸術工科大学の手代木美穂氏の指導を受けた。

保存措置 なお、7次～9次調査では、住宅部分と地下埋設物の範囲のみ、最下層までの遺構精査を完了し、そのほかの箇所については、土地所有者の協力により遺構保存を図った。

(2) 岩手県指定史跡内容確認調査

盛岡市大館町、大新町にまたがる大館町遺跡は、古くから知られる縄文時代中期の集落遺跡である。平成12年11月24日に岩手県史跡に指定されている。その後盛岡市では、この遺跡の集落範囲や構成などの内容確認のため、平成14年度から国庫補助を受けながら発掘調査を継続している。平成14年度は遺跡東部の集落範囲を把握するために調査を実施した。その結果、大木8a式期の竪穴住居跡1棟、縄文時代中期から晩期に至る遺物包含層、古代の溝1条などが確認された。集落の東側にも、南側と同様に遺物包含層の形成が明らかとなり、集落東部の一端が確認された。平成16年度は平成14年度調査区の西側延長部分を調査対象とし、集落中央の広場東側の竪穴住居密集部分の範囲を明らかにする事を目的とした。調査期間は平成16年度から17年度の2ヵ年とし、教育委員会文化課より、遺跡の学び館が調査依頼をうけて実施している。平成16年11月1日付けで史跡現状変更許可申請書を岩手県教育委員会に提出。同年11月9日付けで許可されている。平成16年度の発掘調査は11月9日～同年12月21日まで、平成17年度は11月28日～12月21日まで実施した。その結果、縄文時代中期の竪穴住居跡8棟、土坑7基、柱穴8口、遺物包含層、古代以降の溝2条を調査、確認している。調査区の西部は集落中央の広場東縁部にあたり、ここから約40m東側あたりまでが竪穴住居の密集範囲と推定した。大館町遺跡の調査成果については平成18年度に報告する計画である。

竪穴住居跡

(3) 整理作業と調査成果の公開

各調査終了後、出土遺物の洗浄と復元、台帳登録、図面、写真、記録類の整理を行い、調査報告書(本書)作成作業を行った。また、整理途中ではあったが、平成18年2月1日から3月21日まで、盛岡市遺跡の学び館企画展示室において、「盛岡を発掘する—平成17年度発掘調査速報—」を開催し、大館町遺跡、宿田遺跡ほかの出土遺物や写真パネルを用いて調査成果を紹介した。期間中558名の来場者があった。また、3月5日(日)には、今年度調査成果報告会を開催。市民を中心に90名の参加があった。

調査速報展

Ⅲ 宿田遺跡の調査

1 遺跡の概要

位 置 宿田遺跡は盛岡市市街地の北西部、前九年一丁目から二丁目に存在する。滝沢台地の南辺部にあたり、南にゆるやかに傾斜した斜面にあたる。遺跡は昭和25年ごろ、小岩末治の踏査によって縄文時代早期の遺跡として確認され（小岩末治1960）、縄文時代早期中葉の貝殻文土器や、早期末葉の榎木1式土器などを紹介している。その後遺跡は市街化が進行し、今日はそのほとんどが住宅地や道路となり、畑地はわずかである。

過去の調査 宿田遺跡の発掘調査は、平成2年度より盛岡市教育委員会が実施している。これまでに6次までの調査を実施し、このうち第5次調査は西方遺跡外の地点の道路建設用地の調査であったが、他の調査は共同住宅や個人住宅建設に係る緊急発掘調査である。遺跡中央部の第1次、第4次、第6次調査では縄文時代早期の土坑、遺物包含層、古墳時代の土坑、奈良～平安時代の円形周溝が調査されている。また、遺跡南部の第2次調査では縄文時代早期の土坑、第3次調査では古代以後の溝、西方第5次調査では時期不詳の溝が調査されている。

2 遺跡南部の調査（第7次・8次・9次調査）

第7次調査から第9次調査は、住宅敷地の関係から連続した調査区となっているため、これらの調査成果を一括して記述する。

（1）遺跡の基本層序と遺構検出状況（第5図～6図）

層位については同じ地形・地質上にある大館町・大新町遺跡で確認された層位名を使用した。

また、後述する10次調査区も下記の層序を基本に調査をおこなっている。

基本層序 I層－表土・耕作土。

II層－黒色・黒褐色土主体。縄文時代後期以降の遺物が主に出土。

本遺跡では、弥生時代後期の土器片や古墳時代の石器（黒曜石）が出土していることから、さらに細分される可能性がある。

III層－黒褐色土（大館町III層は暗褐色土）主体。上～中層は中期の遺物が出土。

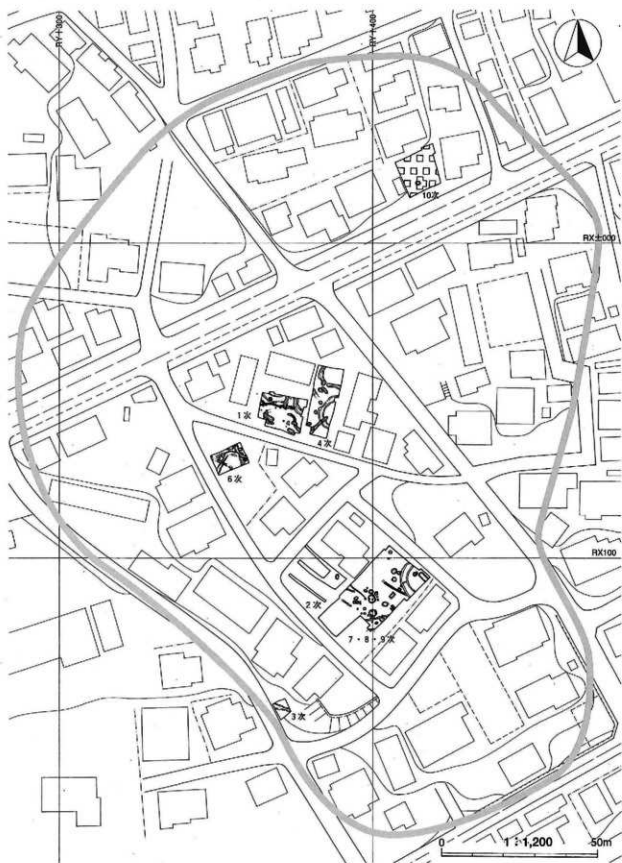
本遺跡では明確なIII層は確認されていない。

IV層－黒褐色土主体。V層との漸位層付近より前期初頭の遺物が出土。

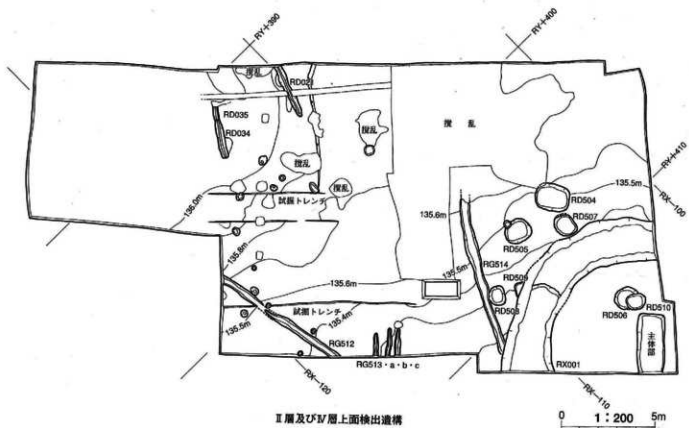
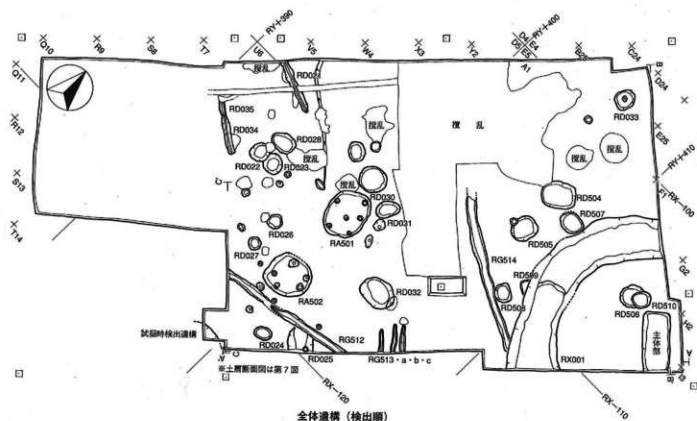
V層－暗褐色土主体。下層より早期初頭～前葉、上層より早期前葉～中葉の遺物が出土。

VI層－褐色・黄褐色土火山灰土主体（分火山灰下部）。草創期～早期初頭の遺物が出土。

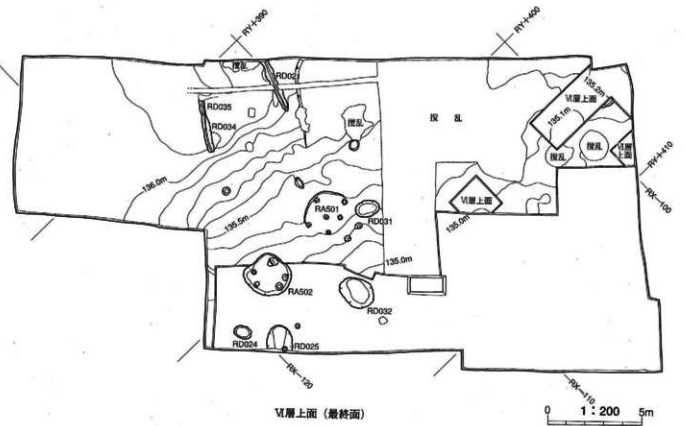
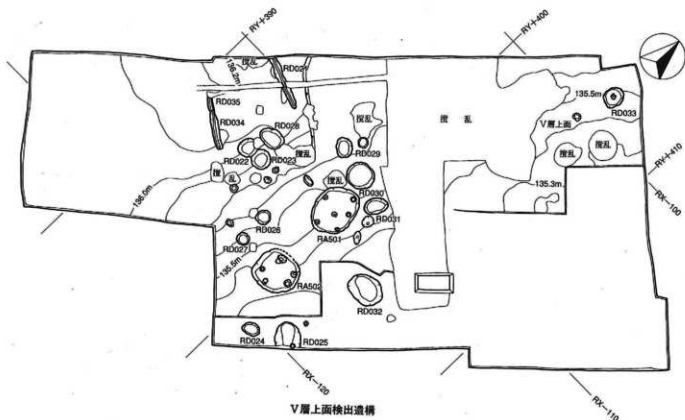
検出状況 調査の結果、縄文時代早期の竪穴住居跡2棟（RA001、002）、縄文時代の土坑15基（RD021～035）、古代の古墳（RX001）、古代の土坑（RD504～510）、溝跡2条（RG512、513）、柱穴及びPit17口（P1～P17）、また、縄文時代早期～前期初頭にかけての遺物包含層を確認した。II層上面からは古墳（RX001）、IV層上面からは、縄文時代の土坑、V層上面からは、縄文時代早期の竪穴



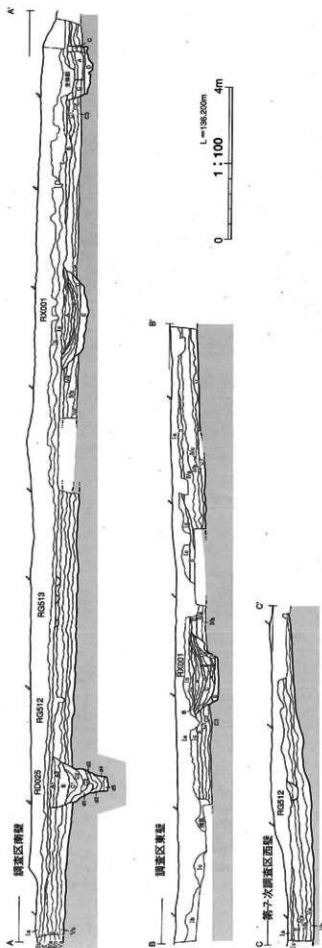
第3図 宿田遺跡地形図



第4図 遺構全体図(1)



第5図 遺構全体図(2)



第6図 調査区土層断面図

住居跡(RA001・002)を検出することができた。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

RA001 竪穴住居跡 (第7図)

時期 早期 平面形 不整楕円形

長軸方向 N22° W

規模 長軸上端2.56m・下端2.28m、短軸上端2.13m・下端1.90m、壁高は0.16m

掘込面 Va層上面 検出面 Va層上面

埋土 自然堆積によるもので、暗褐色土を主体とするA層からなり、2層に細分される。暗褐色土を主体で、塊状の黄褐色土を含み、スコリア粒を含み硬く密にする。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

床の状態 少し凹凸があり、硬くしまる。

柱穴 床面に6口のピットが検出された。P5を中心に、P2～4を西壁付近に、P1・6を東壁付近に配置している。径0.21m～0.25m、床面からの深さ0.07m～0.26mをはかる。埋土は、いずれも黒褐色土を基本とし、粒状の暗褐色土を含み硬くしまる。 遺物 なし

RA002 竪穴住居跡 (第7図)

時期 早期 平面形 不整円形

長軸方向 E25° N 規模 長軸上端

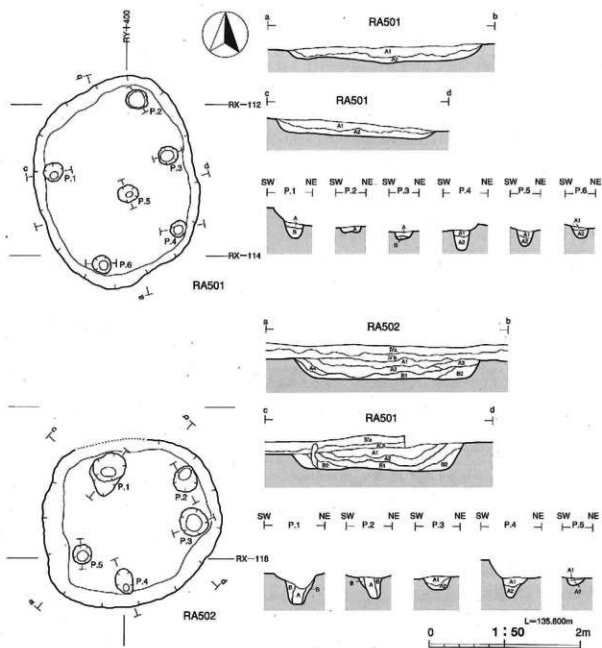
2.37m・下端1.92m、短軸上端2.17m・下端1.85m、壁高は0.34m

掘込面 Va層上面 検出面 Va層上面

埋土 自然堆積によるもので、A・B層に大別され、A層は4層、B層は2層に細分される。

A層-暗褐色土を主体に、A1～3層は塊状の黒褐色土とスコリア粒を少量含む層である。A4層は、暗褐色土を塊状に含み、硬く密にする。

B層-暗褐色土を主体に、粒～塊状の褐色土を含み、スコリア粒を含む層である。各層は褐色土の混入割合で細別される。硬く密にする。



第7図 RA001・RA002竪穴住居跡

- 壁の状態** 外傾し、直壁ぎみに立ち上がる。 **床の状態** ほぼ平坦である。硬くしまる。
- 柱 穴** 床面に5口のピットが検出された。住居内を囲むように壁際に配置されている。径0.23m～0.37m、床面からの深さ0.17m～0.26mをはかる。埋土は、P1・P2は暗褐色土を主体土とするが、褐色土及びスコリア粒の混入割合で柱痕跡(A)掘形埋土(B)に細分される。P3～P5は、暗褐色土を主体に、粉状の黒褐色土と塊状の褐色土を含む層に細分される。
- 遺 物** 図示していないが、A1層・A2層から早期の無文土器破片が2点出土している。

RD021土坑 (第8図)

時期	縄文時代	平面形	溝状 (北側一部調査区外)	重複関係	なし
規模	長軸上端2.92m以上・下端2.79m以上、短軸上端0.31m・下端0.09m、深さは0.69m				
掘込面	削平	検出面	VI層上面		
埋土	自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は3層、B層は3層に細分される。 A層-黒褐色土を主体に、粉~粒状の褐色土を含む。各層にスコリア粒を少量含む。 B層-褐色土を主体に、粒~塊状の暗褐色土を少量含む。各層ともスコリア粒を多量に含む。				
壁の状態	底面から上部0.47mまでは直立気味に立ち上がり、さらに上部は外傾する。				
遺物	なし				

RD022土坑 (第8図)

時期	縄文時代	平面形	不整楕円形	重複関係	RD023を切る
規模	長軸上端0.95m以上・下端0.66m以上、短軸上端0.98m・下端0.62m、深さは0.21m				
掘込面	削平	検出面	Va層上面		
埋土	自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粉状の暗褐色土を少量含むA層からなり、2層に細分される。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし				

RD023土坑 (第8図)

時期	縄文時代	平面形	円形	重複関係	RD022に切られる
規模	上端1.10m・下端0.66m、深さは0.34m				
掘込面	削平	検出面	Va層上面		
埋土	自然堆積によるものである。A・B層に大別されA層は3層に細分される。 A層-黒褐色土を主体とし、暗褐色土を塊状に少量含む層。各層は黒褐色土の混入割合で細分される。 B層-暗褐色土を主体とし、褐色土を塊状に多量に含む層である。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし				

RD024土坑 (第9図)

時期	縄文時代	平面形	楕円形	重複関係	なし
規模	長軸上端0.96m・下端0.74m、短軸上端0.66m・下端0.48m、深さは0.33m				
掘込面	IVa層上面	検出面	IVa層		
埋土	自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粉~塊状の暗褐色土を含むA層からなり、3層に細分される。各層は暗褐色土の混入の割合で細分され、やや硬く、しまっている。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし				

RD025土坑 (第9図)

時期	縄文時代	平面形	溝状 (南半分は調査区外)	重複関係	RG512に切られる
規模	長軸上端1.26m以上・下端1.24m以上、短軸上端1.28m・下端0.46m、深さは1.51m				
掘込面	IVa層上面	検出面	IVa層上面		
埋土	人為地積と自然堆積によるものである。A層～D層に大別され、A層～B層は人為地積、C層～D層は自然堆積である。A層は2層、B層、C層は3層、D層は5層に細分される。 A層-暗褐色土を主体に、粒状の黒褐色土を多量に含む層。 B層-黄褐色土を主体に、粒状の黒褐色土を少量含み、硬く密にしまる層。 C層-黒褐色土を主体に、褐色土と暗褐色土を粉状に、スコリア粒を少量含む層。全体的に硬くしまる。 D層-黄褐色土を主体に、黒褐色土を塊状に、スコリア粒を多量に含む層で、D1・D2層はスコリア粒を多量に含み硬く締まる。D3層以下は上層に比してやわらかい。				
壁の状態	底面から上部0.26mまでは直立気味に立ち上がり、さらに上部は外傾する。遺物なし				

RD026土坑 (第9図)

時期	縄文時代	平面形	円形	重複関係	なし
規模	上端0.75m・下端0.49m、深さは0.21m				
掘込面	IVa層上面	検出面	Va層上面		
埋土	自然堆積によるものである。A・B層に大別されA層は2層に細分される。 A層-黒褐色土を主体とし、褐色土を粒～塊状に少量含み、硬くしまる層。各層はスコリア粒の混入割合細分され、硬く締まる。 B層-褐色土を主体とし、暗褐色土を塊状に含む層。スコリア粒が少量混入し硬く締まる。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。遺物なし				

RD027土坑 (第9図)

時期	縄文時代	平面形	円形	重複関係	なし
規模	上端0.69m・下端0.46m、深さは0.16m				
掘込面	IVa層上面	検出面	IVa層上面		
埋土	自然堆積によるものである。黒褐色土を主体土とし、塊状の暗褐色土を含むA層からなる。各層はスコリア粒の混入割合により2層に細分され、硬く密に締まる。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。遺物なし				

RD028土坑 (第8図)

時期	縄文時代	平面形	楕円形	重複関係	なし
規模	長軸上端1.34m・下端1.10m、短軸上端0.99m・下端0.69m、深さは0.23m。				
掘込面	IVa層上面	検出面	IVa層上面		
埋土	自然堆積によるものである。A・B層に大別されB層は2層に細分される。 A層-黒褐色土を主体土とし、塊状の暗褐色土を含み、硬くしまる。				

B層-にぶい黄褐色土を主体土とし、塊状の暗褐色土及び褐色土を含む。各層は褐色土の混入割合により細分され、硬く密にしまる。

壁の状態 外傾して立ち上がる。 遺物 石器の剥片が1点出土している。

RD029土坑(第8図)

時期 縄文時代 平面形 楕円形 重複関係 なし
 規模 長軸上端1.07m・下端0.75m、短軸上端0.84m・下端0.55m、深さは0.12m
 掘込面 Va層上面 検出面 Va層上面
 埋土 人為堆積によるものである。暗褐色土を主体土とし、塊状の褐色土を含むA層からなる。スコリア粒が混入し硬くしまる。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。 遺物 なし

RD030土坑(第8図)

時期 縄文時代 平面形 円形 重複関係 なし
 規模 上端1.50m・下端1.11m、深さは0.21m
 掘込面 Va層上面 検出面 Va層上面
 埋土 人為堆積によるものである。黒褐色土を主体土とし、塊状の暗褐色土を含むA層からなり、2層に細分される。各層は暗褐色土の混入割合により細分され硬くしまる。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。 遺物 なし

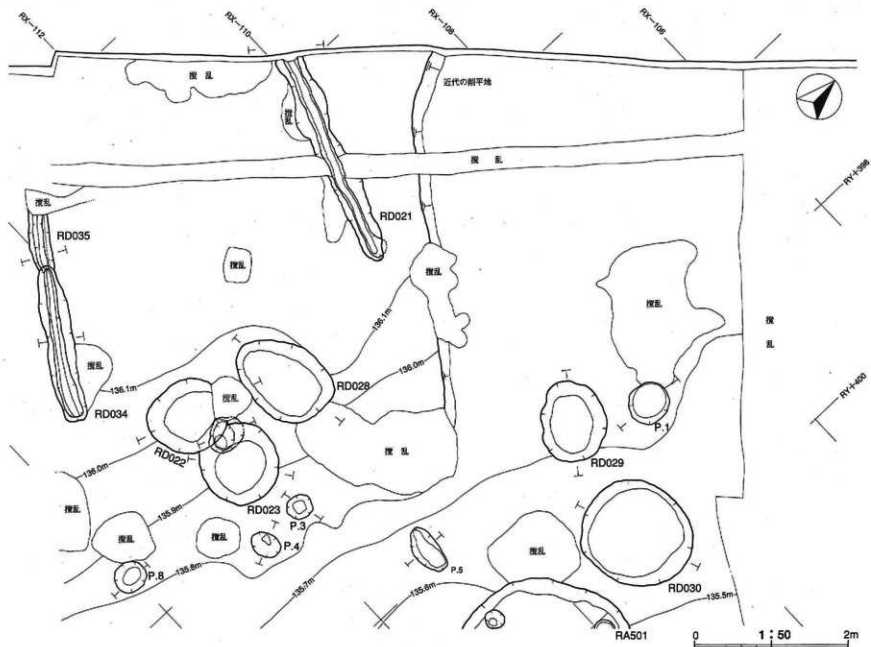
RD031土坑(第9図)

時期 縄文時代 平面形 楕円形 重複関係 なし
 規模 長軸上端1.27m・下端0.96m、短軸上端0.88m・下端0.51m、深さは0.20m
 掘込面 Va層上面 検出面 Va層上面
 埋土 人為堆積によるものである。黒褐色土を主体土とし、塊状の暗褐色土と褐色土を含むA層からなり、2層に細分される。各層は褐色土の混入割合により細分され硬くしまる。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。 遺物 なし

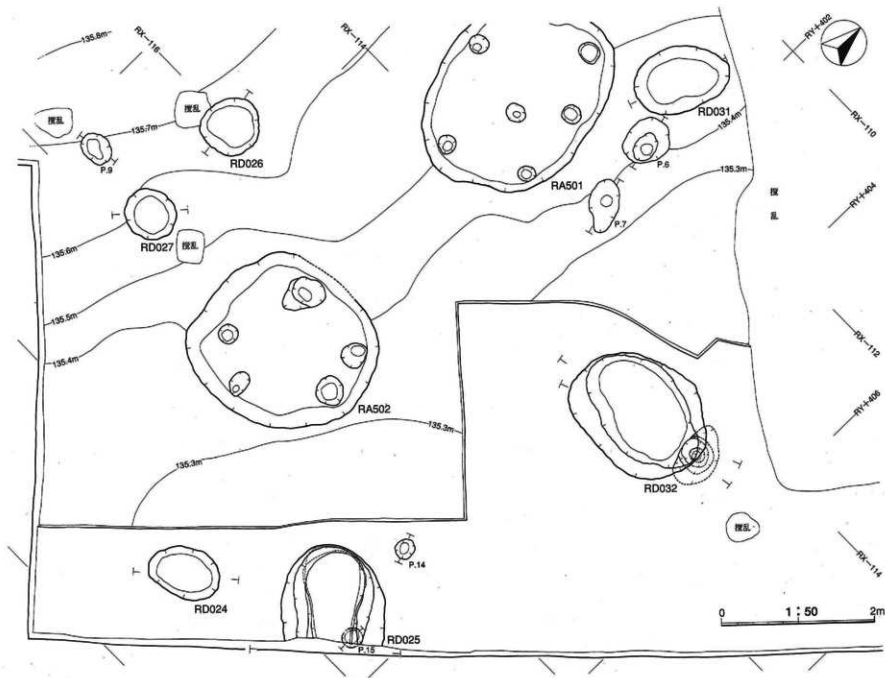
RD032土坑(第9図)

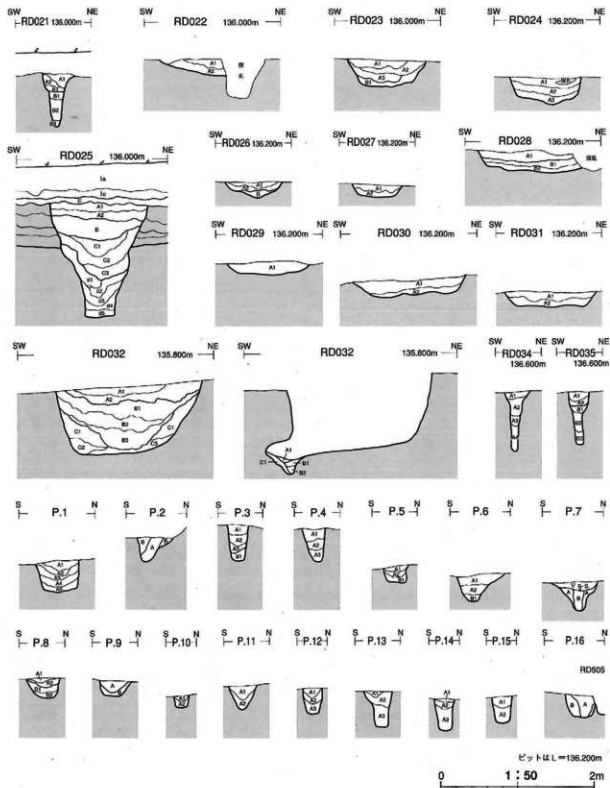
時期 縄文時代 平面形 不整楕円形 重複関係 なし
 規模 長軸上端1.91m以上・下端1.67m以上、短軸上端1.44m・下端0.89m、深さは1.51m
 掘込面 IVa層上面 検出面 IVa層上面
 埋土 自然堆積によるものである。A層～D層に大別され、A層は2層、B層は3層、C層は3層に細分される。

第8図 縄文時代の土坑と柱穴 (1)

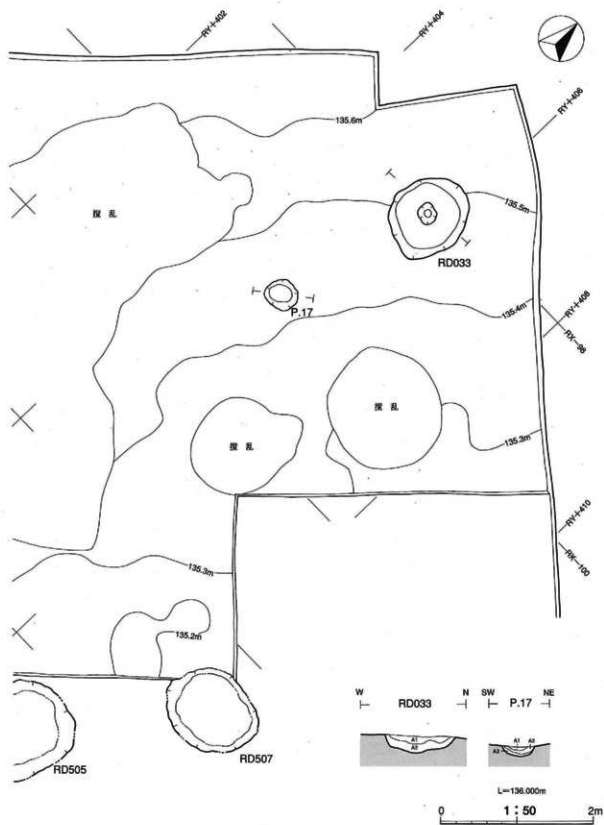


第10図 縄文時代の土坑と柱穴 (2)





第11図 縄文時代の土坑と柱穴土層断面図



第12図 RD033土坑・Pit17

A層-暗褐色土を主体に、塊状の黒褐色土を含む層。

B層-暗褐色土を主体に、塊状の褐色土と黒褐色土を含む層。スコリア粒を多量に含み、硬く密に締まる。

C層-黄褐色土を主体に、粉~塊状の暗褐色土を含む層スコリア粒を少量含む層。全体的に硬く密に締まる。

壁の状態 底面から上部0.26mまでは直立気味に立ち上がり、さらに上部は外傾する。長軸東端に袋状のピットがある。 遺物 なし

RD033 土坑 (第11図)

時期 縄文時代 平面形 不整形円形 重複関係 なし

規模 上端1.11m・下端0.82m、深さは0.22m

掘込面 IVa層上面 検出面 IVa層上面

埋土 自然堆積によるものである。暗褐色土を主体土とし、塊状の黒褐色土と褐色土を含むA層からなり、2層に細分される。各層は褐色土の混入割合により細部され硬く締まる。

壁の状態 外傾して立ち上がる。 遺物 なし

RD034 土坑 (第8図)

時期 縄文時代 平面形 溝状 重複関係 RD035を切る

規模 長軸上端2.08m・下端1.98m、短軸上端0.34m下端0.08m、深さは0.79m

掘込面 削平 検出面 VI層上面

埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体土とし、粉~粒状の褐色土を含むA層からなり、4層に細分される。各層は褐色土の混入割合により細分される。

壁の状態 底面から上部0.51mまでは直立気味に立ち上がり、さらに上部は外傾する。 遺物 なし

RD034 土坑 (第8図)

時期 縄文時代 平面形 溝状 (北側は乱乱) 重複関係 RD034に切られる

規模 長軸上端0.79m・下端0.73m、短軸上端0.26m下端0.09m、深さは0.70mをはかる。

掘込面 削平 検出面 VI層上面

埋土 自然堆積によるものである。A・B層に大別されA層は2層、B層は3層に細分される。

A層-褐色土を主体土に塊状の黄褐色土を含み、硬く密にしめる層。

B層-黒褐色土を主体土に粉状の黄褐色土を少量含む層。

壁の状態 底面から上部0.42mまでは直立気味に立ち上がり、さらに上部は外傾する。

遺物 なし

柱穴・ピット (第8図~12図・19図・20図)

柱穴等 全体で17口の柱穴もしくはピットが確認されている。P1~P9、P17はV層上面から検出されているが、P10~P16はIV層上面から検出され、縄文時代以後の可能性もある。P4から敲打磨石の破片1点が出土している。

遺物包含層・遺構外出土遺物 (第12図～第14図)

縄文時代の遺物包含層は、7次調査区南側から8次調査区の包含層は良好に残存し、ここから縄文時代早期～前期の土器、石器が出土している。

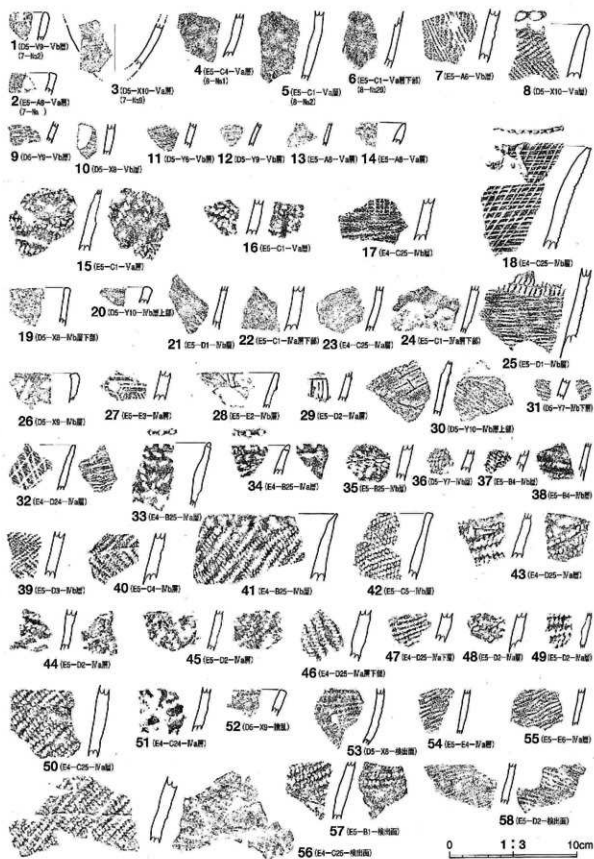
- 土 器 7～9次調査での土器の出土総数は185点を数える。層別別の点数(全体比)ではVb層が7点(4%) Va層が16点(9%) Ivb層が37点(20%)、Iva層が74点(40%)、Ivb層が37点(20%)、Ia層が29点(16%)、となっておりIV層からの出土が多い。また、攪乱からは20点(11%)を数える。次に文様別の出土点数をみると、無文・無文部35点(19%)、沈線文9点(5%)、貝殻文4点(2%)、条痕文24点(13%)、表裏縄文23点(12%)、縄文22点(12%) 繊維土器68点(37%)となっている。

	Vb層	Va層	Ivb層	Iva層	II層	Ia層	攪乱	計
無文・無文部	2	9	8	7	0	4	5	35
沈線文	0	3	2	2	0	1	1	9
貝殻文	1	0	2	1	0	0	0	4
条痕文	4	0	5	6	0	7	2	24
表裏縄文	0	2	4	9	0	3	5	23
縄文	0	1	2	11	2	3	3	22
繊維	0	1	14	38	0	11	4	68
計	7	16	37	74	2	29	20	185

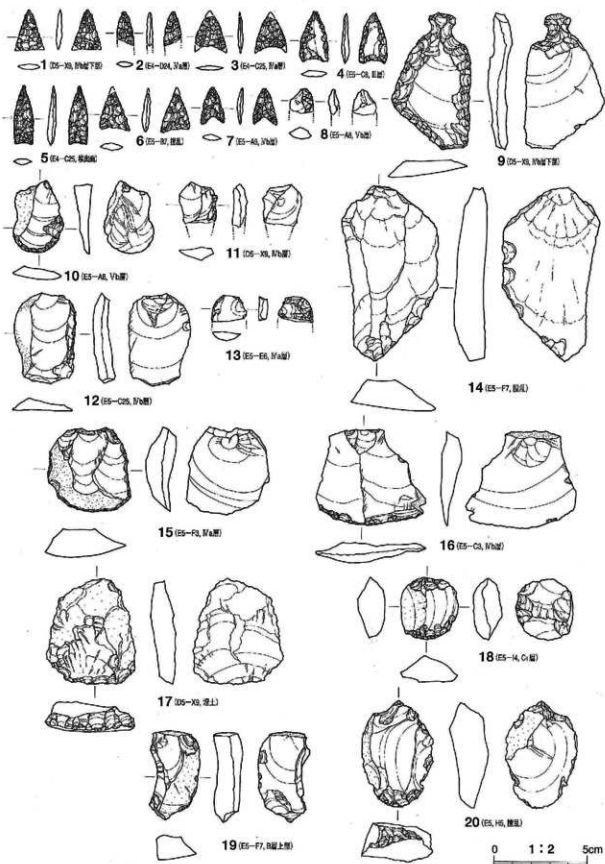
表2 宿田遺跡第7～9次調査区遺物包含層出土土器集計表

第12図1～16はV層、17～55はIV層、56～58は表土直下の検出面より出土したものである。

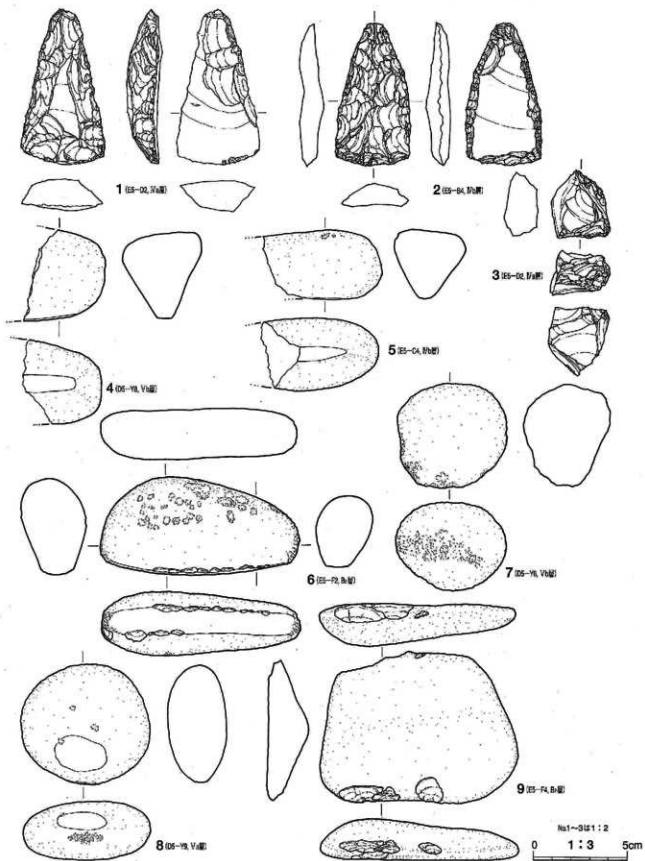
- V 層 1～9は無文土器の深鉢口縁部および体部である。1・2は外面の色調は明褐色を呈す。2は平坦な口唇部で、外面の色調は明褐色を呈す。3は体部下段部にぶい黄褐色を呈する。4・5は胎土に石英粒を大量に含み、外面の色調はぶい黄褐色を呈す。器厚は0.5～0.7cmである。6は縦位に入念なミガキが施され光沢を帯びる。7は縦位の貝殻腹線文を施したあとに、斜位の平行沈線を施文する。8は口唇部に刻み目、口縁部に羽状縄文を施す。9・10は、沈線文を施す条痕文土器で、9は胎土に金雲母を含み外面はぶい黄褐色を呈し、10は胎土に石英粒を含み、外面は明褐色を呈す。11・12は微隆起線文を施す条痕文土器で、胎土に金雲母と繊維を含み、12は横位に条痕を施し胎土は明褐色を呈す。13は胎土に繊維と金雲母を微量に含み、外面の色調はぶい褐色を呈す。14は縦位に条痕を施す深鉢土器の口縁部で、胎土に金雲母を大量に含む。15・16は内外に縄文を施し、胎土に繊維を含む深鉢の体部で、同一個体である。
- IV 層 17は横位の条痕文を施し、横位と縦位の貝殻腹線文を施す。18は口唇部に刻み目、口縁部から体部にかけて平行沈線を施した後に、斜位平行沈線を施す。19は口唇部が平坦な無文土器で、外面は褐色を呈す。20は口唇部がやや平坦な無文土器で、外面はぶい黄褐色で胎土にやや微量の金雲母を含む。21・22は沈線文を施す条痕文土器で、21は斜位に条痕を施し胎土に金雲母と微量な繊維を含み、外面はぶい黄褐色を呈す。22は縦位に条痕を施した後に、斜位に沈線を施す深鉢底辺部付近で、胎土は明褐色を呈す。23・24は無文土器あるいは無文部である。23は胎土に金雲母を含み、



第12圖 遺物包含層出土土器



第13圖 遺物包含層・遺構外出土石器(1)



第14図 遺物包含層・遺構外出土石器(2)

外面は褐色を呈し丁寧に磨かれている。24の外面はにぶい黄褐色を呈し内面に条痕を施す。25は連続爪形状刺突を施し、器面を丁寧に磨いた後、横位に貝殻緑文を施す。26は無文土器の深鉢口縁部である。口唇部は平坦に調整されやや内湾する。27は横位・斜位の平行沈線、縦位に貝殻緑文を施す。28～30は微隆起線文を施す深鉢口縁部と体部である。28は内外に条痕を施し外面に微隆起線を施す。胎土に繊維を含む。29は平行隆線の間に縦位隆線を充填する。29は表裏に条痕が施され、外面は光沢を帯び微隆起線を施す。胎土に、雲母と微量の繊維を含み、赤褐色を呈す。30は表裏に条痕が施され、外面は方向を違えた斜位平行沈線を幾何学文を施文する。胎土には微量の雲母と繊維を含む。33～58は縄文を施した土器である。33・34は同一個体である。口唇部に刻みがあり、胎土に多量の繊維を含む。5～38は胎土に繊維を含む土器である。39は。40は胎土に繊維を含む土器である。41、42は胎土に繊維を含む深鉢口縁部である。42は口唇部が平坦に調整されている。43～45は内外面に縄文を施し、胎土に金雲母と繊維を含む。46は胎土に繊維を含む土器である。47は胎土に繊維を含み、内面は横位に条痕を施す。48・49は原体圧痕を施すものである。50、51は胎土に繊維を含む深鉢体部である。52は無文土器である。53は横位並行沈線を施す条痕文土器である。54・55は胎土にわずかに繊維を含む。56は胎土に大量の繊維を含む。57は内外面に縄文を施し、胎土に繊維を含む。58は表裏に条痕を施し、胎土に金雲母を含み、にぶい黄褐色を呈す。

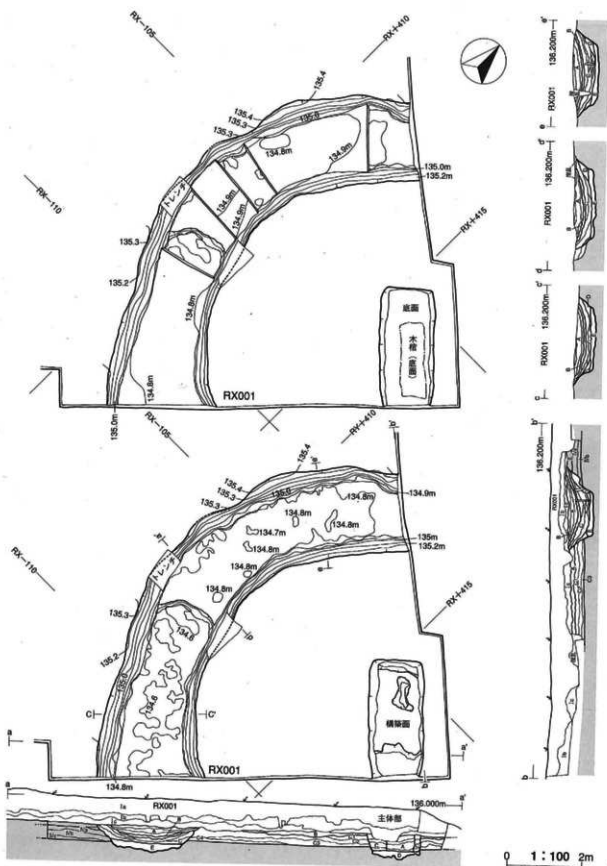
石 器 第13図、14図は石器である。第13図1は平基の石鏃である。背面右側縁→背面左側縁→腹面右側縁→腹面左側縁→背面基部→腹面基部の順番で押圧剥離を施している。2～7は頁岩製凹基の石鏃である。2は下半分が欠損しているが、両面に丁寧な剥離調整を施す。3は先端部及び基部が欠損している。4は背面・腹面に主要剥離面を残す。5は抉りが浅く腹面左側縁→腹面右側縁→背面左側縁→背面右側縁→腹面基部→背面基部の順番で押圧剥離をおこなっている。6は先端部が欠損し、左右非対称である。7は基部の抉りが深く、両面に丁寧な剥離調整を施す。8は頁岩製の削器である。下半分は欠損しており、背面右側縁に剥離調整を施す。9は縦長の石匙で背面全縁と腹面の上部に押圧剥離を施す。10は背面下端から右側縁にかけて刃部調整を施す。11は背面右側縁部に刃部調整を施した削器である。12は削器である。背面右側縁部に刃部調整を施し、背面左側縁部には原礫面を残す。13は頁岩製の削器である。背面左側縁部、腹面右側縁部に刃部調整を施す。14は玄武岩製の削器である。背面下部から右側縁部にかけて刃部調整を施す。15～20は頁岩製である。15は背面のほぼ全縁にわたり刃部調整を施す。16は背面下部部に剥離調整を施す。17・18・20は搔器である。17は背面上部部から下部にかけて原礫面を残し、背面下部部に刃部調整を施す。18は背面に原礫面を残し、背面上部部と下部部に丁寧な刃部調整を施す。19は背面右側縁部に剥離調整を施す。背面及び腹面に原礫面を残し、背面下部部に丁寧な刃部調整を施す。21・22は頁岩製の筥状石器である。21は背面の全周に刃部調整を施す。22は両面の周縁を刃部調整する。23両面調整石器で微細な階段状剥離が2面認められる。24・25・26は敲打磨石である。24・25は全体の半分が欠損する。26は下面に敲打摩痕、扁平な面に敲打痕がある。27は安山岩製の敲石である。28は磨石であるが、あわせて敲石としての機能をもつ。29は砂岩製の衝撃剥離のある礫である。

(松川光海)

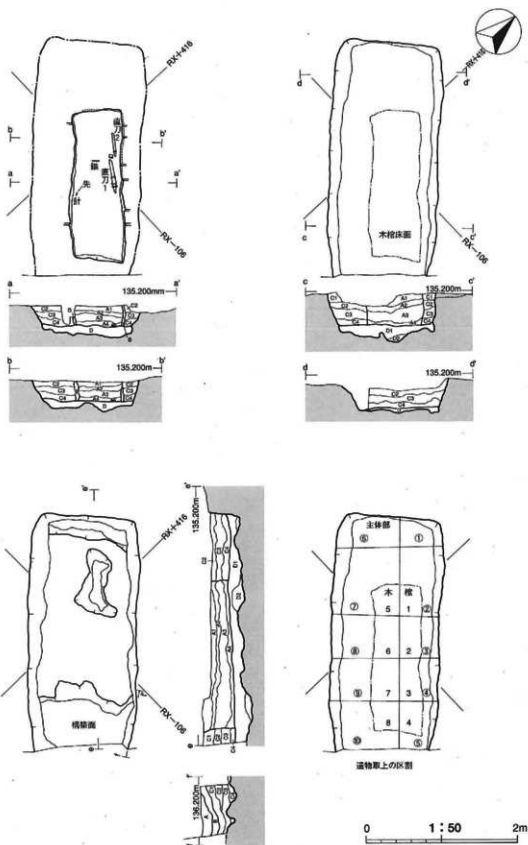
(1) 古代の遺構と遺物

RX001古墳 (第16図～第18図・第22図)

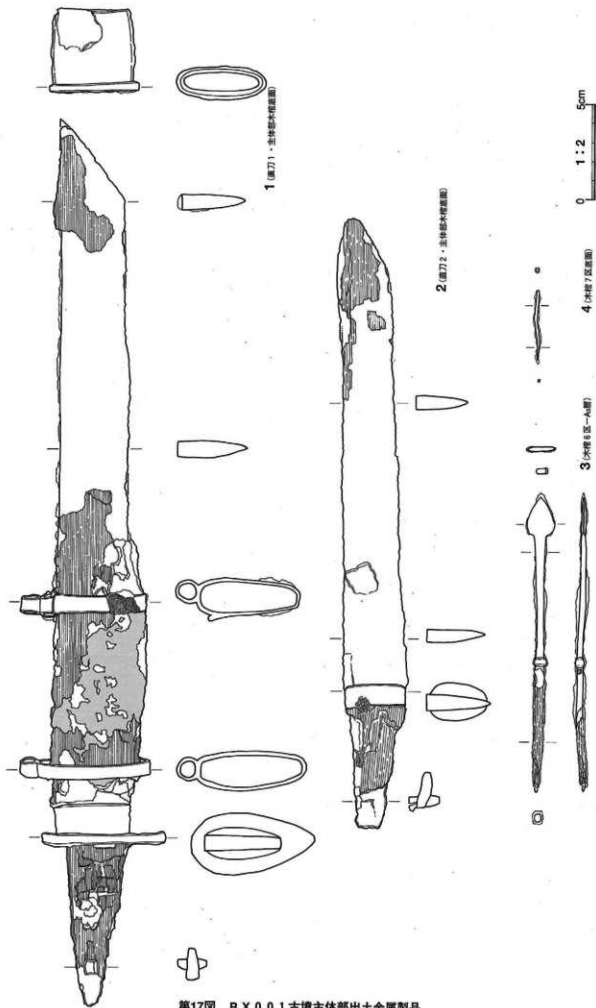
- 時期** 古墳時代末期～奈良時代前期 平面形 円墳・規模 周溝内径で約10m、外径で約14.5m
- 検出状況** 古墳主体部の大半と、周溝の北西側部分を検出 検出面 II層上面(表土直下)
- 墳丘** 残存しない
- 周溝** 周溝の規模は上幅で2.1m～2.7m、底面幅1.2m～1.8m、深さ60cm～70cmの規模で、断面形は逆台形である。溝外側は遺物包含層のII層を、溝内側では後述する構築土A・B層を切って掘り込まれている。溝の底面は凹凸が著しく、一部では周溝掘削時の鋤先痕も認められた。底部上面には地山の小岩井浮石層や洗火火山灰層のブロックが多量に混入する構築土(E層)が、10cm～20cmの厚さに敷き詰められ、平坦な面が構築されている。この面を底面とした場合、溝は深さ50cm～68cm、底面幅1.45m～2.0mとなる。
- 周溝埋土** 周溝の埋土は大きく5層に分けられる。このうちA層からD層は自然堆積層である。A層は黒色土または黒褐色土主体で、A3層には灰白色火山灰が少量混入する。B層は黒褐色土主体で灰白色火山灰が粒状から塊状になって多く混入する。C層は黒褐色土主体で暗褐色度が粒状に混入する。D層は周溝畔面や墳丘の崩落土で、黒褐色土や暗褐色土のなかに褐色土の小塊が混入する。E層は溝の底面に敷かれた構築土で、暗褐色土のなかに黄褐色土の大きな塊が混合している。各土層の硬さや締り具合は中ぐらいである。埋土中のA2層からA3層にかけて、第22図6～8の土器、E層下の底面から同図15の石器が出土している。
- 周溝内側** 周溝内側には遺物包含層のII層、IV層は認められず、構築土のA～C層が堆積している(第16図)。主体部東畔面では不自然な落ち込みとなって堆積しており、この土層は人為的堆積土である。A層は暗褐色土と黒色土の混合上、B層は黒色土に暗褐色土、褐色土が塊状に混入する。A・B層には木炭の混入が認められ、土質は軟弱である。C層は黒色土または黒褐色土主体で暗褐色土が混入する。C1層からC3層のうち、C1層～C2層は混合土の割合が高く、軟らかくC3層は混合土の割合は少なくなり、上層部分よりも硬さや締りがある。
- 主体部** 主体部は古墳中央部にあり、主軸方位はN46°Wを示す。南端部は調査区外であるが、確認範囲の全体の大きさは長軸3.1m、幅は1.42m、深さは38cm～60cmを計る。構築面(掘込の底面)は極めて起伏があり、15cm～30cmの厚さで構築土が敷き詰められ、平坦な主体部底面が造られている。確認範囲の底面の広さは長軸が3.08m、短軸が1.16mで、検出面から底面までの深さは25cm～40cmである。中央やや東よりに長方形の木棺が納められている。木棺の木質部分はほとんど不朽し失われているが、傾面の板材の痕跡は埋土のB層として確認されており、随所に薄い炭化材が認められる。防腐のため板材の表面を焼いていた可能性がある。天井板の痕跡は確認されなかったが、後述する副葬品が、主体部の底面よりも1cm程度浮き上がっている状態からみて、底板が存在した可能性がある。木棺はその痕跡から長さ2.02m、幅が62cm～72cm、残存する高さは26cmから40cmである。
- 主体部埋土はA層が木棺内の堆積土。B層は木棺痕跡。C層が木棺外の主体部埋土、D層が底面構築土である。A層は黒褐色土ないしは暗褐色土主体で暗褐色土や褐色土が粒状に混入する。B層は軟弱でしまりのない粉状の黒褐色土、C層は黒褐色土に褐色土が塊状に混入する。D層は黄褐色土と暗褐色土、黒褐色土の塊状の混合土である。A層、C層、D層の硬さや締りは中ぐらいである。



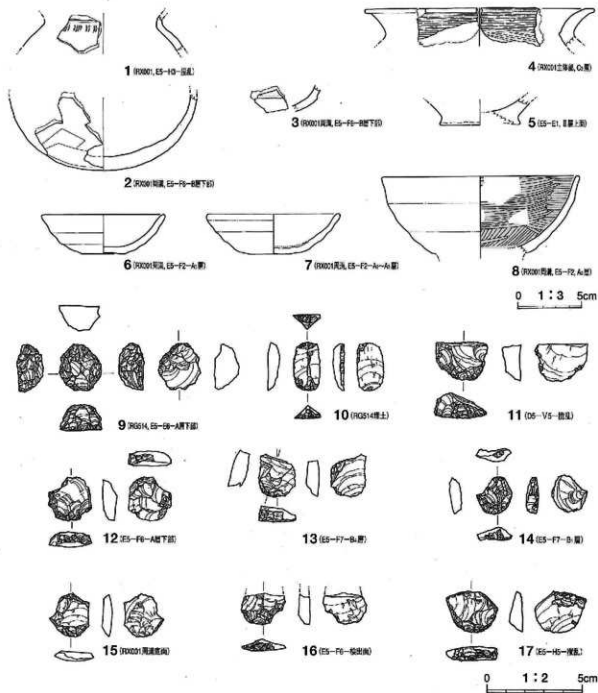
第15図 RX001古墳



第16図 RX001古墳主体部



第17图 RX001古墳主体部出土金属製品



第18図 RX001古墳・RG514溝出土土器・石器

遺物出土状況 遺物は主体部、周溝の双方から出土している。主体部では木棺東側の底面には、直刀2振（第17図1・2）が納められ、いずれも切先を北に、刃部を東に向けて置かれている。ほかに針状の鉄製品（4）は西側壁中央に近い底面より、先端を北にして出土している。また（3）の鉄鏝は中央北よりのA3層中より出土している。ほかに木棺外のC3層から第22図4の土師器と滑石製小玉が1点出土している。周溝からは第22図2・3の土器がB層の下部から、6～8の土器がA3層から、15の黒曜石製の石器が底面から出土している。また、周溝検出面からも滑石製小玉2点（第11図B）が出土している。3点の滑石製小玉は径3.1mm～3.2mm、高さ1.7mm～1.8mm、穿孔の径は0.9mm内外である。

鉄製品 第17図1と2は直刀である。1の直刀は総長46.7cm、刃長36.0cm、反りはなく、巾巾は4.1cm、先巾は3.3cm、大カマス形の鋒長は3.8cm、柄の長さ8.6cmである。切先の先端を僅かに欠損しており、総長、刃長、鋒長は、実際には現況の計測値よりも4mmほど長かったと推定される。刀身の断面形は平棟の平肉付である。刃は長さ6.5cm、巾3.3cm、厚さ4mmの鉄製で、鉄製の籠で留められている。柄には鈎から6.3cmの位置に、表側から差し込まれた鉄製の目釘が残るが、柄頭は残存しない。柄の木質部は刀身の元側によく残り、一部鋒の近くにも残る。表面には黒漆が残存している。また鉄製単環単脚の足金物が9cmの間隔をおいて残存する。これには繊維質の付着が認められ、表側にはひじょうに目の細かい繊維。内側には目の粗い繊維が付着する。目の細かい繊維は柄の木質部内側の中央にも付着して残存する。鞘尻の籠は鉄製の薄板を巻いて造られ、口の部分には玉縁状の緑金が巻かれている。長さ4.3cm、高さ4.4cm～4.7cm、巾1.3cmを計り、内部に木質部が少量残存する。金属分析の結果から、籠の表面には青銅が巻きつけられている(第IV章参照)。

2はやや小ぶりの直刀で、総長32.2cm、刃長24.6cm、元幅3.4cm、先巾2.7cmを計り。刀身断面は平棟の平肉付である。柄の長さは6.5cm、刀身との境に籠が残る。この表側には目の粗い繊維が付着している。緑金から5cmの位置に鉄製の目釘が残るが、差込の方向は不明である。刀身の先端付近には木製鞘の一部が残存する。

第17図3は鉄鎌である。総長15.3cmで茎の尻を3mm程度欠損している。

同4は針状の鉄製品である。これよりもさらに細い針状鉄製品の断片が木棺内A4層から出土している(第11図版)。

土器 第22図3は土師器環の口縁部と体部境の小破片である。4の土師器甕の口縁部は、内外ナデ調整で体部内面の上部端にはハケメが認められる。6・7はあかやき土器の小皿で、いずれも底部は糸切無調整である。8は土師器の高台付環で底部、高台部を欠く。内面はヘラミギキ後黒色処理されている。

石器 第22図12～16は黒曜石製の石器で古墳堀溝から出土している。いずれも不透明で青灰色の縞模様のある黒曜石である。形態は不定形で粗い刃部をもつ。17は古墳主体部西側の攪乱から出土した搔器で、縞模様のある黒曜石で作られている。

RD504土坑(第19図)

時期	古代	平面形	隅丸長方形	主軸方向	N58° E	重複関係	なし
規模	長軸上端1.82m・下端1.6m、短軸上端1.44m・下端1.1m、深さは0.28m						
掘込面	削平	検出面	IVa層上面(表土直下)				
埋土	黒褐色土または暗褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が混入する。						
壁の状態	外傾して立ち上がる。		遺物	なし			

RD505土坑(第19図)

時期	古代	平面形	楕円形	主軸方向	N16° E	重複関係	なし
規模	長軸上端1.4m・下端1.1m、短軸上端1.2m・下端0.88m、深さは0.32m						
掘込面	削平	検出面	IVa層上面(表土直下)				
埋土	黒褐色土または暗褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が混入する。						
壁の状態	外傾して立ち上がる。		遺物	なし			

RD506土坑 (第19図)

時期	古代以後	平面形	楕円形	主軸方向	N55° E
重複関係	RX001とRD510を切る				
規模	長軸上端1.3m・下端1.1m、短軸上端1.2m・下端0.9m、深さは0.3m				
掘込面	削平				
検出面	古墳構築土A層上面(表土直下)				
埋土	埋土 自然堆積。黒褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が少量混入する。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし				

RD507土坑 (第19図)

時期	古代以後	平面形	楕円形	主軸方向	N75° E	重複関係	なし
規模	長軸上端1.3m・下端1.1m、短軸上端1.2m・下端0.9m、深さは0.3m						
掘込面	削平						
検出面	RX001古墳構築土A層上面(表土直下)						
埋土	自然堆積。黒褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が少量混入する。						
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし						

RD508土坑 (第19図)

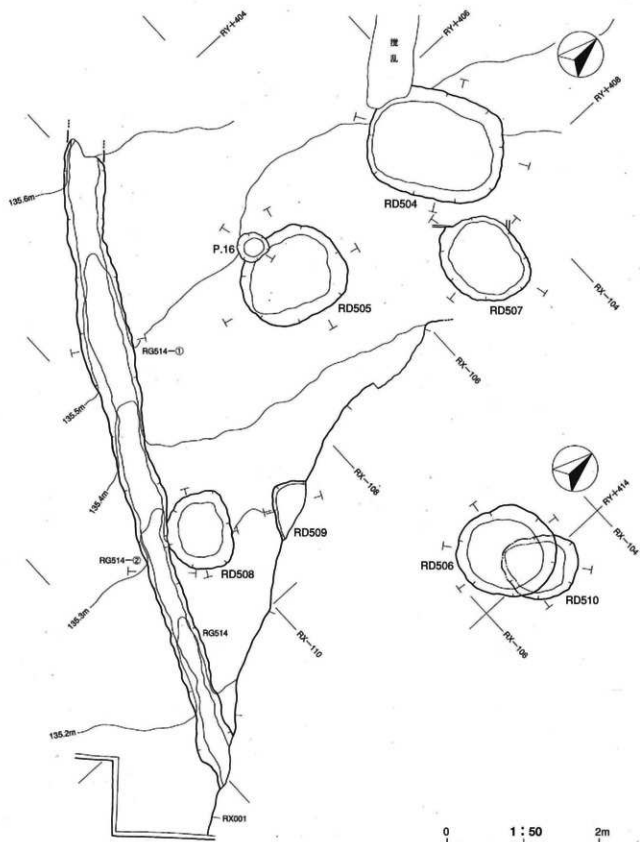
時期	古代	平面形	不正楕円形	主軸方向	N57° E	重複関係	RG514と重複するが新旧不明
規模	長軸上端1.02m・下端0.7m、短軸上端0.86m・下端0.6m、深さは0.2m						
掘込面	IV層上面						
検出面	IV層上面						
埋土	自然堆積(?)。黒褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が少量混入する。						
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし						

RD509土坑 (第19図)

時期	古代	平面形	隅丸方形	主軸方向	N57° E
重複関係	RX01古墳周溝に切られる				
規模	長軸上端0.75m以上、短軸上端0.42m以上、深さは0.04m				
掘込面	IV層上面				
検出面	IV層上面				
埋土	自然堆積(?)。黒褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が少量混入する。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし				

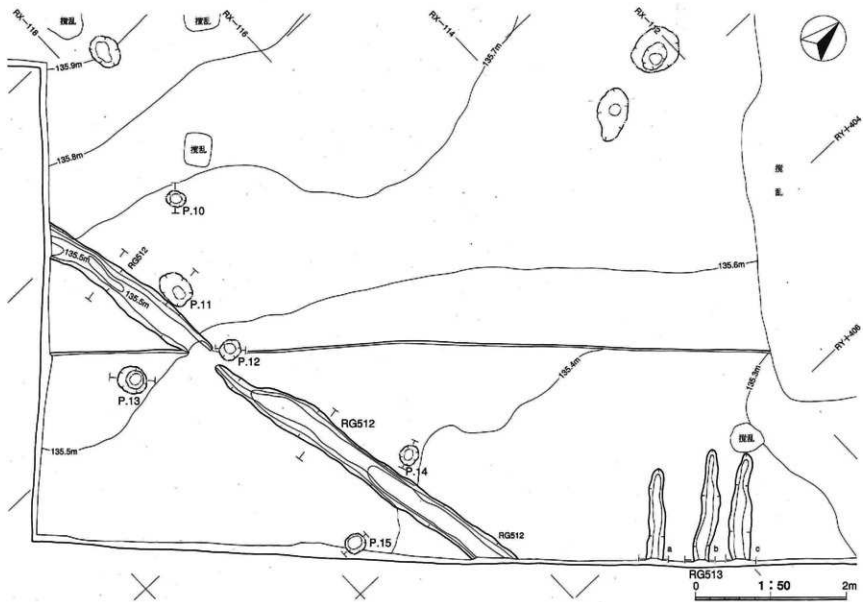
RD510土坑 (第19図)

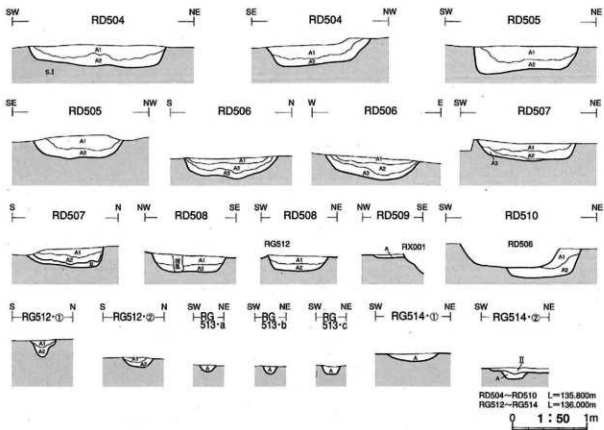
時期	古代	平面形	楕円形	主軸方向	N57° E
重複関係	RX001古墳構築土A層を切り、RD506土坑に切られる。				
規模	長軸上端1.00m、短軸上端0.84m、深さは0.4m				
掘込面	削平				
検出面	RX001古墳構築土A層上面				
埋土	埋土 人為堆積。黒褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が少量混入する。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。 遺物 なし				



第19図 古代の遺構 (1)

第20回 古代の遺構 (2)





第21図 古代の土坑・溝土層断面図

RG512溝 (第20図)

時期	古代	重複関係	なし	規模	幅35cm~45cm、深さは10cm~40cm
掘込面	長軸上端1.00m、短軸上端0.84m、深さは0.4m	掘込面	削平		
検出面	RX001古墳構築土A層上面				
埋土	人為堆積。黒褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が少量混入する。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。遺物 なし				
規模	長軸上端1.00m、短軸上端0.84m、深さは0.4m 掘込面 削平				
検出面	RX001古墳構築土A層上面				
埋土	人為堆積。黒褐色土主体で、暗褐色土や褐色土が少量混入する。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。遺物 なし				

RG512溝 (第20図)

時期	古代	重複関係	なし	規模	幅35cm~45cm、深さは10cm~40cm
掘込面	IV a層上面	検出面	IV a層上面	埋土	自然堆積。黒褐色土主体。
壁の状態	外傾して立ち上がる。遺物 なし				

RG513溝群 (第20図)

時期	古代以後	重複関係	なし	規模	幅10cm~28cm、深さは5cm~10cm
掘込面	削平	検出面	II層上面	埋土	自然堆積。黒色土主体。
壁の状態	外傾して立ち上がる。遺物 なし				

RG514溝 (第19図・22図)

時期	古代	重複関係	RX001古墳周溝に切られる	
規模	幅0.38m～0.52m、深さ5cm～10cm		掘込面	IV層上面
検出面	IV層上面	埋土	自然堆積。黒色土主体。壁の状態 外傾して立ち上がる。	
遺物	埴土(A層)から第22図9・10の石器が出土している。9は不透明な漆黒色の黒曜石で作られた拵指状円形搔器である。10は不透明で青灰色の竊模様の黒曜石の搔器である。縦長剥片の背面上下両端を調整し刃部を作っている。			

(室野秀文)

3 遺跡北部の調査 (第10次調査)

検出遺構 第10次調査区は過去の削平により、遺物包含層のうちⅡ～Ⅳ層は残存していなかった。今回の調査では分火山灰層下部の褐色・黄褐色土上部(Ⅵ層)まで精査した。その結果、Ⅵ層上面から縄文時代早期の土坑1基(RD036)を確認し、Ⅴ層に縄文時代早期の遺物包含層の形成を確認した。また、攪乱からではあるが、弥生～古代の土器が出土している。

RD036土坑 (第22図)

時期	縄文時代早期	平面形	楕円形	長軸の傾き	W2°N	重複関係	なし
規模	上端1.46m・下端1.04m、短軸上端・1.14m下端0.77m、深さは0.28m						
掘込面	Vb層上面	検出面	Vb層上面				
埋土	自然堆積によるもので、暗褐色土を主体としスコリア粒を多量に含むA層からなり、3層に細分され、硬く密にしまる。						
壁の状態	外傾して立ち上がる。		遺物	縄文時代早期の細片が出土している。			

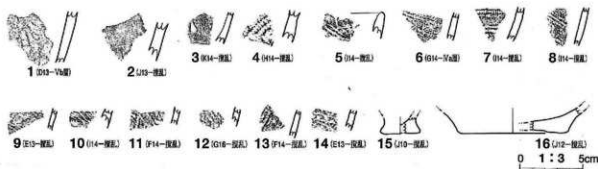
遺物包含層・遺構外出土遺物 (第23図)

縄文土器 1は縄文時代早期の無文土器の深鉢体部である。胎土に雲母と石英粒を含み、外面の色調は褐色を呈す。2は尖底部付近の無文帯と考えられ、器面は横位のミガキが施されている。3は無文土器である。胎土に金雲母と石英粒を含み、外面の色調は明褐色を呈する。4は縄文が施された深鉢で、胎土に繊維を含むものである。

弥生土器 5～15は弥生時代後期の土器である。5は口縁部に附加条縄文を施し、胎土に石英粒を含む。6は附加条縄文を施すものである。7は横位に附加条縄文が施されている。8は横位の沈線文の上に附加条縄文を施す。9は斜行する附加条縄文を施す。10・11は同一個体だと考えられる寛の体部で、原形正痕文が施されている。12縦位に附加条縄文を施す。13は平行沈線文の間に交互刺突文を充填し、その下に斜位の平行沈線文を施す。14は小形壺の底部である。

15は小形壺の底部で、内外面にヨコナデがみられ、外面色調は黄褐色を呈し、胎土に粗粒砂と雲母を含む。

(松川光海)



第23図 第10次調査出土遺物

4 宿田遺跡調査のまとめ

(1) 縄文時代

第7次～第9次調査区は、遺跡のある台地の南東向き斜面部である。ここでは縄文時代早期の集落跡と遺物包含層、土坑群、縄文時代の陥し穴等の土坑群、ピット群を確認した。また、遺跡北部の第10次調査区でも縄文時代早期の土坑1基と遺物包含層が確認された。縄文時代早期の竪穴住居跡は、遺跡南部の第7次調査で2棟確認された。不正角円形のプランで今は確認されず、壁沿いに柱穴が配される。内部からの出土遺物は微量の無文土器の破片である。この竪穴住居の掘り込まれたV層は縄文時代早期、竪穴住居跡を覆うIV層からは早期から前期初頭の遺物が出土している。

土器は縄文時代早期前葉の無文（無文部を含む）土器、早期中葉の沈線文土器、貝殻文土器、早期後葉から末葉の条痕文土器、早期末から前期初頭の縄文土器、織維土器である。大新町遺跡で多く出土している押形文土器は、本遺跡ではいまのところ出土していない。条痕文土器には微隆起線文の付されるものや沈線の施されるものがあり、平成13年度の第4次調査では、土坑から早期後葉の根木I式に相当する土器群が出土しており、今回の出土土器の文様もこれに共通するものである。また早期末葉から前期初頭の縄文土器には、斜縄文のほか表裏縄文が比較的多く出土している。なかには剥離した器壁の内部にも縄文の認められるものがある。これら縄文土器には織維を含むものが多い。

石器は石鏃、石匙、削器、搔器のほか、笥状石器、両面調整石器、敲打磨石、敲石、磨石、衝撃剥離のある扁平な礫がある。包含層以外からの出土石器には、縄文時代中期以後の石器も含まれているが、遺物包含層IV層、V層出土の石器は、共存する土器類からみて早期から前期初頭に属する石器類であろう。

土坑は不正楕円形、不正円形プランのものが多く、IV層の下層、V層上面から確認されたR D029、030、031の3基の土坑は縄文時代早期の土坑である。他にIV層上面から確認された土坑が9基あるが、これらの詳細な時期については不明である。このうちR D025、032の2基の土坑は長い楕円形プランで掘り込みも深く、形状や規模などから陥し穴の可能性が高い。また、調査区の北西部には3基の陥し穴（土坑）が存在するが、土坑の形態や埋土の特徴から縄文時代中期以後の遺構であろう。

縄文時代

土器

石器

土坑

弥生時代 弥生時代については、遺跡北部の第10次調査区の表土中などから、弥生時代後期末葉の土器が出土している。

赤穴式土器 すべて細かな破片であるが、文様などの特徴から赤穴式に相当すると考えられる。細かな土器破片の僅かな散布のみであり、遺構などは確認されず、この時期の詳細な内容については不明である。

(2) 古 代

古代の遺構は土坑群や溝、溝群、古墳1基が確認された。このうち古墳よりも新しい土坑は2基で、その他の土坑5基と溝2条は、掘込面や埋土の状況から古墳よりも古い遺構である。古墳よりも下層のIV層上面に検出された土坑や溝は、埋土の特徴から古代に属する遺構である。この遺構群には、古墳主体部や周溝等から出土した、5～6世紀の土師器や滑石製小玉が伴う可能性が高い。また、古墳の周溝や周囲の溝の埋土などからは黒曜石製の石器が出土している。本遺跡では第1次、第4次調査で北大1式土器と南小泉式類似の土師器が出土し、黒曜石製の石器も出土している。これらは5世紀後半から6世紀前半の年代が考えられている。また、岩手県内の調査では北上市の岩崎台地遺跡群や、奥州市の中平入遺跡など、5～6世紀の遺跡や7世紀の古墳からの出土例がある。今回の宿田遺跡出土の石器も古墳に先行する時期か、または古墳と同時期の石器である可能性が高い。黒曜石の多くは宮城県宮崎町の湯ノ倉産である。

黒曜石

(3) 古 墳

古 墳 今回の古墳は、これまでの調査で確認された円形周溝と同様に、墳丘がほとんど残存せず、発掘調査を実施して初めて確認された。今回は主体部と周溝の一部が確認されたが、基底部の調査の結果、古墳のおおよその構築状況も知ることができた。それは、古墳の周溝内側には、縄文時代から古代の遺物包含層のII層と、縄文時代遺物包含層のIV層、V層が残存せず、人為的なA層～C層の堆積が確認されたことである。このうちC層の下部については自然堆積の可能性もあるが、A層からC層上部については人為的な土の混合や堆積状況が確認されている。これは墳丘の構築や周溝掘削前に、構築範囲の土砂のすき取りや基底部の盛土整地が行われた可能性を示すものである。この盛土には炭化物の混入が認められており、整地にあわせて、構築予定地の草木の抜根や焼却等も行われたのであろうか。この整地、盛土の後、周溝が掘削され、掘削により発生した土をういて墳丘が構築されたと考えられる。この墳丘の構築途中、または墳丘構築後に、中央部に主体部の土坑が掘り込まれている。周溝、主体部ともに、掘削後は構築面に土を敷き詰め、これを固めて平坦な底面を造っている。

木 棺 主体部の木棺は中央やや東よりに安置され、板材の表面を焼いて防腐処理を施している。木棺内部の底面東よりには、2振の直刀が、鋒を北に向けて置かれていた。大形の直刀は方頭太刀と推定され、鈎や足金具、鞘の鏝が残存するが、柄頭部分は残存しない。刀身の形態から八戸市丹後平古墳群第22号墳や、矢巾町藤沢巖夷森古墳群第12号墳などから出土した直刀に類似しており、その形態から7世紀から8世紀前葉に属するものであろう。このほかに西側底面には針状の鉄製品1点。中央西よりの木棺内堆積土中には鉄鏝1点が出土している。このうち鉄鏝は、出土層位などから木棺の蓋上などに置かれていたものが、蓋の腐朽後に棺内に落ち込んだ可能性がある。

木棺内部や主体部からは、先の鉄製品のほかは副葬された土器類などは見当たらない。古墳の主

体部や周溝からは土師器の甕、埴、坏の破片などが出土しているが、これらの特徴は5世紀～6世紀のもので、古墳よりも明らかに年代が古い。周溝や主体部から出土した滑石製小玉も、古墳と同時期のものではなく、5～6世紀の土師器に伴う製品と考えられる。また、古墳周溝の埋土中にレンズ状に堆積するB層は、10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰層である。この火山灰層の上のA3層からは、10世紀後半に位置付けられるあかやき土器の小皿や土師器の内面黒色処理の高台付坏がまとまって出土している。古墳の年代よりも2世紀以上の隔りがあるが、遺跡内にこの時期の遺構、遺物はいまのところ確認されていないこと等から、古墳等に係る、儀礼行為の痕跡の可能性もある。

築造の基盤 本遺跡ではこれまでに円形周溝が9基、古墳が1基確認された。円形周溝は古墳から約50m北西のやや高い地点に集中している。平成13年度実施の第4次調査では3基の円形周溝が確認され、そのうちの1基からは9世紀前葉の須恵器坏が出土している。本遺跡から4.7km西方の滝沢村大釜館遺跡では、9基の円形周溝が確認され、9世紀前半代の土師器・須恵器が相当量出土している。ここでも円形周溝からは主体部は確認されていない。宿田遺跡、大釜館遺跡のような円形周溝は、削平された墳丘の中に主体部の存在が類推される。陸橋を掘り残した周溝の形態などから、おそらくは7・8世紀の終末期古墳の延長にあたり、9世紀前半あたりの墳墓の一形態である可能性が高い。今回検出された古墳から南方に向けて、60m×100mほどの範囲で緩傾斜面の地形が張り出し、南側で約2mの落差をもって沖積面の低地に接している。地形的にはこのあたりに数基の古墳の存在が推定され、7・8世紀の終末期古墳群は台地の緩斜面部、9世紀の円形周溝群は台地の高位部分という具合に、時期によって墳墓の構築エリアが分かれている可能性がある。

宿田遺跡では第1次調査と第4次調査で、5世紀から6世紀にかけての土師器や黒曜石が出土している。周辺地域では、約700m北の安倍館遺跡で、円形の土坑から4世紀の土師器甕と後北C2-D式土器が出土し、付近から円板形石製模造品が採集されている。4・5世紀以後、北上川沿いから宿田遺跡周辺は、墓域や祭祀の場であったのであろうか。また、古墳から約1km北西の大館町遺跡で、7世紀前半代の堅穴住居跡が確認されており、大館町、大新町、小屋塚の各遺跡では8世紀代の集落も確認されている。地理的には、これらの7・8世紀集落が、宿田遺跡の古墳築造の基盤となったものと考えられ、古墳の被葬者は、現在の厨川地域の首長層であった可能性が高い。ただ、円形周溝の造られた9世紀前半代の集落は、この付近ではいまのところ未確認であり、この遺跡の古墳群や円形周溝と周辺集落遺跡との関係については、宿田遺跡のほか、周辺遺跡の調査の蓄積を待ち、より具体的な解明に努めたい。

(松川光海・室野秀文)

参考・引用文献

- | | | |
|---------|------|---|
| 小岩 未治 他 | 1960 | 『岩手県史第一巻(上古編)』岩手県 |
| 玉川 英喜 | 1980 | 『岩手県内の円形周溝と方形周溝』『紀要X』(財)岩手県埋蔵文化財センター(※) |
| 八木 光国 | 1996 | 『東北北部の終末期古墳群』『岩手考古学第8号』岩手考古学会 |
| 集落遺跡研究会 | 2004 | 『岩手県土師器集成』 |
| 岩手県立博物館 | 1982 | 『岩手の土器—県内出土資料の集成—』 |
| 岩手県立博物館 | 2005 | 『出土遺物の組成からみた物質文化交流—古代北方地域出土鉄関連資料を中心に—』 |

(財) 岩手県埋蔵文化財センター	1995	〔岩崎台地遺跡群発掘調査報告書〕
(財) 岩手県埋蔵文化財センター	2002	〔中平入遺跡・根夷塚古墳発掘調査報告書〕
玉山村教育委員会	2003	〔玉山の文化財〕
	1987	〔高柳遺跡〕
滝沢村教育委員会	2003	〔大釜館遺跡発掘調査報告書－滝沢村区画整理事業発掘調査－〕
八戸市教育委員会	1991	〔丹後平古墳〕
八戸市教育委員会	1996	〔丹後平（1）遺跡・丹後平古墳〕
八戸市教育委員会	2002	〔丹後平古墳群〕
盛岡市教育委員会	1995	〔小原塚遺跡第1次～27次発掘調査報告〕
盛岡市教育委員会	1997	〔上田塚夷森古墳群・太田塚夷森古墳群－発掘調査報告書－〕
盛岡市教育委員会	1998	〔大館遺跡群大館町遺跡・大新町遺跡－平成8年度・9年度発掘調査概報－〕
盛岡市教育委員会	1999	〔安倍館遺跡－厨川城跡の調査－〕
盛岡市教育委員会	2002	〔盛岡市内遺跡群平成13年度発掘調査概報〕
盛岡市教育委員会	2005	〔盛岡市内遺跡群平成15年度・16年度発掘調査報告〕
矢巾町教育委員会	1986	〔徳田遺跡群詳細分布調査報告書－藤沢秋森古墳群の発掘調査－〕
矢巾町教育委員会	1999	〔藤沢秋森古墳群－アパート建設に伴う緊急発掘調査－〕
(※) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター		

IV 岩手県盛岡市宿田遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

岩手県盛岡市に所在する宿田遺跡は、個人住宅や共同住宅立替によって平成2年から平成17年まで、10次にわたって緊急発掘調査された遺跡である¹⁾。第7・8次の調査では、円形周溝を持つ末期古墳1基が検出され、主体部木棺内から2本の直刀が確認された。関係出土品と古墳の形態から、古墳の造営年代は7世紀から8世紀前半と推定されている。

出土した直刀のうちの1本は短寸で身幅が広い方頭横刀である。ほぼ同形態の資料としては、岩手県北上市長沼9号墳、青森県八戸市丹後平22号墳出土資料が挙げられる^{2) 3)}。近年、末期古墳から出土した刀剣類については金属考古学的調査が精力的になされて、イ) 7世紀から9世紀に比定される東北地方北部出土刀剣類の中には、中央政府またはその影響下にあった地域からもたらされたもの、あるいはその技術系譜を引く刀工集団によって作刀されたと推定されるもの、ロ) 北方大陸からもたらされたとみることができるもの、ハ) 東北地方北部または北海道において形態変化をとげたとみることができるもののいずれかに分類される資料があり、7世紀後半から8世紀初頭に鉄器の組成が大きく変化することが指摘されている⁴⁾。

宿田古墳出土直刀がどのような履歴を経て遺跡内にもたらされたか、その点についての基礎資料を得ることを目的として、2振りの直刀の金属考古学的調査を実施した。以下に調査結果を報告する。

2 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は2振りの直刀(表1 No.1・No.2)である。調査は保存処理と並行して行われた。X線透過観察を実施し資料の内部構造を確認した後、資料の外観形状を損ねることがないと判断された棟部(図1 a₁、図4 a₁の矢印を付した位置)から、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリルを使って微小試料を抽出し、化学分析および組織観察を実施した。調査資料の概要は表1に示すとおりである。

3 調査方法

抽出した試料を2分し、一方は組織観察に、もう一方は化学成分分析に供した。組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、試料に残存する非金属介在物をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(EPMA)で分析した後、メタルが残っているNo.1についてはナイトール(硝酸 2.5ml、エチルアルコール 97.5mlの混合溶液)で腐食し、組織観察した。化学分析用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。洗浄した試料を130℃で2時間以上乾燥し、メノウ乳鉢で粉砕した。粉砕した試料を直接テフロン分解容器に秤量し、酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe(全鉄)、Cu(銅)、マンガン(Mn)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、リン(P)、チタン(Ti)、けい素(Si)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)、砒素(As)、およびモリブデン(Mo)の14元素を、誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)で分析した。

4 調査結果

4-1 №1の内部構造

図1bは№1のX線透過写真である。錐、籠、および卑脚の足金物が鮮明に写し出されている。切先部分の錆化が進んでいるものの、刀身の残存状況は良好である。籠は金属製で、後述する蛍光X線分析結果を加味すると、鉄板表面に薄い青銅製の板が貼られていた可能性がある。

4-2 №1 籠の蛍光X線分析結果

図2は№1 籠の蛍光X線分析結果である(測定部位は図1aに指示)。主成分はFeで、微量のCu、錫(Sn)、As、および亜鉛(Zn)が検出されている。鉄板で籠の形を整えた後、薄い青銅製の板を重ねて製作された可能性がある。

4-3 抽出した試料の化学組成

№1および№2から抽出した試料の化学成分分析結果を表2左欄に示す。№1および№2のT.Feはそれぞれ88.69mass%、85.04mass%で、錆とメタルが混在した試料である。№1からは0.029mass%のCu、0.052mass%のNi、および0.156mass%のCoが検出されている。

4-4 抽出した試料の組織観察結果

№1から抽出した試料はそのほぼ全域がメタルによって構成されていたので、ナイターで腐食した。マクロエッチング組織は一樣に腐食されている(図3a₁)。マクロエッチング組織領域R₁および領域R₂内部のマイクロエッチング組織から推定される炭素量は、0.1~0.2mass%である(図3b₁・b₂)。図3c₁はメタルに見出された代表的な非金属介在物のEPMAによる組成像(COMP)、図3c₂および図3c₃はその定性チャートである。非金属介在物は、灰色粒状の酸化鉄(Fe₂O₃)：形状と化学組成からウスタイトと推定される)およびFe-Si-Al-Mg-P-O系のガラス化した領域(GI)によって構成される。№2から抽出した試料は錆化が著しく、錆化前の地金の状態を推定できる領域を見出すことができなかった(図4)。

5 考察

№1の刀身腰部には0.1~0.2mass%の亜共析鋼が配されている。確認された鋼が刀身の全域に及んでいるか、局所的に配されたのかを明確にすることは難しい。この点については当該資料から広領域にわたる調査用試料を抽出し、確かめる必要がある。刀身の鋼に見出された非金属介在物は、ウスタイトと推定される結晶とFe-Si-Al-Mg-P-O系のガラス質ケイ酸塩からなる。局所的にはあるにせよ、鋼製造過程で非金属介在物組成とほぼ同じ組成の鉄滓と鉄とが接触した状態が存在したものと推定される。籠は鉄製で、その上に薄い青銅製の板が重ねられていた可能性がある。№2から抽出した試料は錆化が進んでいたため、錆化前の金属組織を推定できる領域を見いだすことはできなかった。

表3にはこれまでに実施した、東北地方北部の末期古墳から出土した主な直刀の金属考古学的解析結果を示した。古代における鋼製造法には複数の方法があったと考えられる。同じ製鉄原料を用いたとしても、生産方法により異なった組成の鋼が製造される。従って、表2および表3の分析値を単純に比較し、直刀の製作に使用された鋼を分類するという方法では、有意性のある分類結果を得ることは難しい。

表2、表3に示す化学成分の中で、Cu、Ni、およびCoの3成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタル

に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまると推定される。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

図5a・bは、表2、表3の化学成分分析結果から、Ni、Coが0.01mass% (100ppm) 以上含有されている試料を選別し、それぞれの $(\text{mass}\% \text{Co}) / (\text{mass}\% \text{Ni})$ (Co^*)、 $(\text{mass}\% \text{Cu}) / (\text{mass}\% \text{Ni})$ (Cu^*)、 $(\text{mass}\% \text{Ni}) / (\text{mass}\% \text{Co})$ (Ni^{**})、 $(\text{mass}\% \text{Cu}) / (\text{mass}\% \text{Co})$ (Cu^{**}) を求め、それらの値をプロットしたものである。図5a・bの領域Aには、大和政権または律令政府、あるいはその影響下にある地域からもたらされた、もしくはその技術系譜を引く刀工によって製作されたとみることができる刀剣類が、領域BにはNo1とはほぼ同形態の直刀および石井昌国氏によるI型の巖手刀⁵⁾が分布する。No1は図5a・bの領域Bに分布する。No2は、図5a・bのいずれにおいてもRfEg・Rg(表3)に近接した位置にある。宿田遺跡出土直刀の金属考古学的解析によって、化学組成の異なる直刀が同一古墳の主体部に埋納されていたことが明らかとなった。

領域BにはNo1とはほぼ同形態の丹後半22号墳出土直刀[Rf6(表3)]、長沼9号墳出土直刀[Rf8(表3)]が分布する。これら3振りの直刀は、ほぼ同じ組織の地金を用い、同一の技術系譜を引く刀工集団によって作刀された可能性がある。No1とRf6およびRf8の直刀では、鉄チタン酸化物の有無という点で非金属介在物組成に差異がみられる。No1とRf6およびRf8の直刀を作刀する際に使用された鋼の製造法に差異があったことを想定することができる。この点については、類例の蓄積と当該時期の鉄生産関連遺構から出土した資料の金属考古学的調査結果の蓄積を図りながら、検討することとしたい。なお、No2は、丹後半44号墳出土直刀とはほぼ同じ組成の地金を用いて製作された可能性がある。

宿田遺跡が造営された7世紀後半から8世紀初頭には、製品鉄器または製品鉄器を製作するための素材として使用された原料鉄が、複数の地域から東北地方北部にもたらされていた、と推定される。同時代に比定される鉄関連資料の金属考古学的調査が行われ、その結果と考古学の発掘調査結果との比較・検討が進めば、東北地方北部における当該時期の鉄器普及と使用の実態がみえてくるにちがいない。

註

- 1) 当該遺跡の調査・報告に携わられた盛岡市道跡の学び館・室野秀文氏からのご教授による。
- 2) 草間俊一・玉川一郎『長沼古墳群』岩手県和賀町教育委員会、1974年、pp.41-42。
- 3) 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書X 丹後半古墳』八戸市教育委員会、1991年、pp.45-47。
- 4) 赤沼英男『出土遺物の組成からみた物質文化交流—古代北方地域出土鉄関連資料を中心に』岩手県立博物館、2005年、pp.26-54。
- 5) 石井昌国『巖手刀』雄山閣出版株式会社、1966年。

表1 調査資料

No.	図版番号	資料名	検出遺構	推定時期
1	第18図 1	直刀	RX001主体部木棺内底面	7世紀から8世紀前葉
2	第18図 2	小刀		

注) 資料名、検出遺構、推定時期は盛岡市教育委員会による。

表2 銜角付背の分析結果

No.	化学成分(mass%)														ミクロ組織	n.m.i.	Cu・Ni・Co三成分比			
	T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Al	Ca	Mg	V	As	Mo			Co*(Co/N)	Cu*(Cu/N)	Ni**(Ni/Co)	Cu**(Ni/Co)
1	88.69	0.029	<0.001	0.052	0.156	0.03	0.004	0.46	0.005	0.004	0.003	0.001	0.01	0.005	Pa(0.1-0.2)	IO, GI	3.00	0.56	0.33	0.19
2	85.04	0.007	0.001	0.007	0.031	0.09	0.004	0.06	0.012	0.008	0.003	0.002	0.00	0.001	no	no	4.43	1.00	0.23	0.23

注1)分析はICP-AES法による。n.m.i.は非金属介在物。

注2)Paはパーライト、括弧内の数値はマイクロエッチング組織から推定される炭素量。IOは酸化鉄、GIはガラス質ケイ酸塩。

表3 東北地方北部・北海道出土直刀の分析結果

No	資料記号	資料名	出土地	材質	化学組成 (mass%)										n.m.i	Cu・Ni・Co三成分比			
					T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Co*(Co/N)	Cu*(Cu/N)		Ni**(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)		
Rf1	FUG-1	方頭太刀	北海道金沢市アゾベツ製鉄所遺跡	Rg	53.24	0.020	0.005	0.005	0.004	0.06	0.001	1.82	no	1.00	4.00	1.00	4.00		
Rf2	KUM-1	方頭太刀	岩手県花巻市朝堂古墳群跡地	Eg	94.05	0.025	0.034	0.023	0.005	0.02	0.009	0.41	IO, XF, Ma	0.67	0.73	1.49	1.09		
Rf3	TNT-15	方頭太刀	青森県八戸市内後平15号墳	Eg	62.11	0.009	0.015	0.012	0.001	0.02	0.005	0.675	no	0.80	0.60	1.25	0.75		
				Rg	63.15	0.011	0.024	0.018	0.010	0.01	0.010	0.639	no	0.75	0.46	1.33	0.61		
Rf4	FZM-1	直刀	岩手県盛岡市大町源沢跡14号墳	Rg	94.60	0.006	0.004	0.008	0.004	<0.01	<0.001	0.56	XF, GI	2.00	1.50	0.50	0.75		
Rf5	KNK-1	直刀	北海道宇都宮市カナン2遺跡	Eg	46.04	0.008	0.018	0.017	<0.001	0.07	<0.001	0.293	XF, GI	0.94	0.44	1.06	0.47		
Rf6	TNT-22	方頭横刀	青森県内子町後平22号墳主体部	Eg	66.83	0.004	0.011	0.033	0.008	0.080	0.109	0.262	XT	3.00	0.36	0.33	0.12		
				Rg	67.63	0.023	0.031	0.063	0.007	0.12	0.173	0.202	XT, XF, Ma	2.03	0.74	0.49	0.37		
Rf7	TNT-44	方頭太刀	青森県八戸市内後平44号墳主体部	Eg	65.48	0.004	0.007	0.027	0.003	0.04	0.019	0.57	XT, XF, Ma	3.86	0.57	0.26	0.15		
				Rg	96.89	0.004	0.010	0.048	<0.001	0.05	0.005	0.230	XT	4.80	0.40	0.21	0.08		
Rf8	NGM-9	直刀	岩手県北上市長沢9号墳	Rg	93.81	0.011	0.022	0.047	0.004	0.053	0.141	0.080	XT, Ma	2.16	0.52	0.46	0.24		
Rf9	TNT-7	直刀	青森県内子町後平7号墳主体部	Eg	67.38	0.025	0.019	0.058	0.003	0.09	0.032	0.296	no	3.05	1.32	0.33	0.43		
				Rg	99.01	0.012	0.037	0.097	0.002	0.18	0.007	<0.001	0.001	IO, XT, XF, Ma	2.62	0.32	0.38	0.12	
Rf10	TNT-3	直刀	青森県内子町後平3号墳土器	Eg	62.03	0.090	0.009	0.078	0.003	<0.01	0.003	0.178	GI (Cu粒)	8.67	10.0	0.12	1.15		
				Rg	63.03	0.017	0.005	0.035	0.009	<0.01	0.043	2.14	(Cu粒)	7.00	3.40	0.14	0.49		

注1)分析はICP-AES法による。

注2)n.m.i.は非金属介在物。IO:酸化鉄(クワーストと推定される)、XT:鉄チタン酸化物、XF:Fe-Mg-Si-O系化合物、GI:ガラス質ケイ酸塩、Ma:マトリックス。

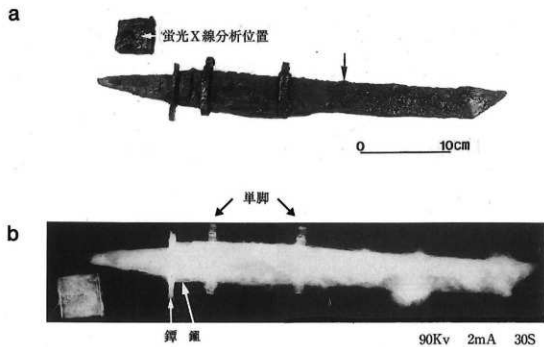


図1 No.1の外観とX線透過写真

a : 外観、矢印は試料抽出位置。b : X線透過写真

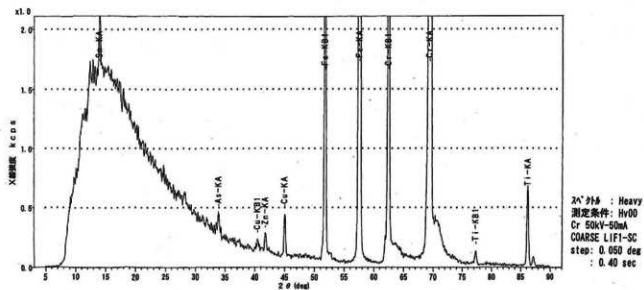


図2 No.1の蛍光X線分析結果

分析位置は図1aに指示

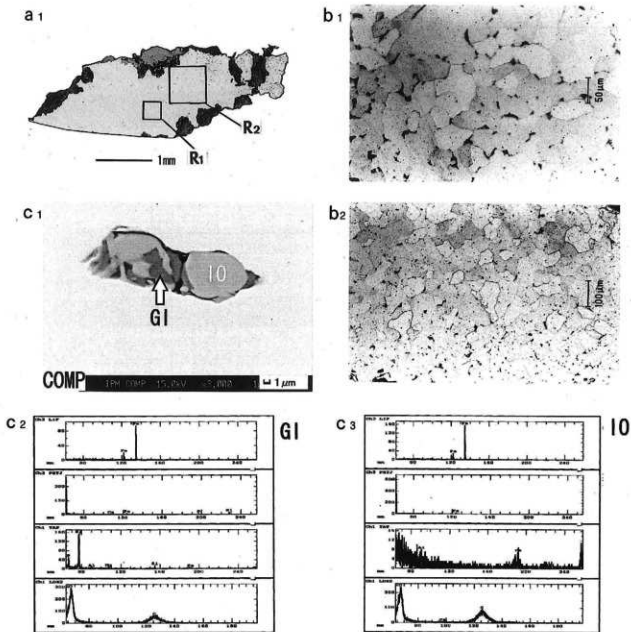


図3 No.1 から抽出した試料の組織観察結果

a₁: マクロエッチング組織。エッチングはナイタルによる。b₁・b₂: a₁領域R₁・R₂内部のマイクロエッチング組織。
 c₁-c₃: a₁メタルに見出された非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。IO: 酸化鉄 (ウスタイトと推定される)、GI: ガラス質ケイ酸塩。



図4 No.2の外観と抽出した試料のマクロ組織
 外観の矢印は試料抽出位置。

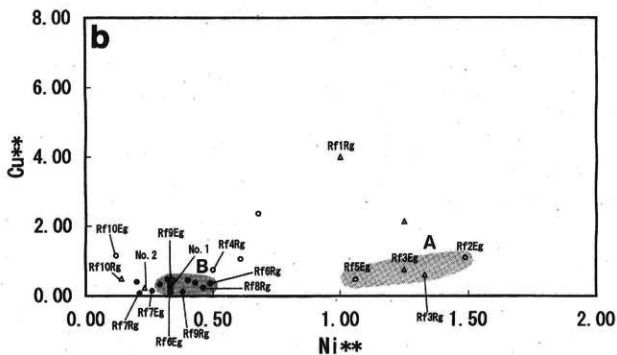
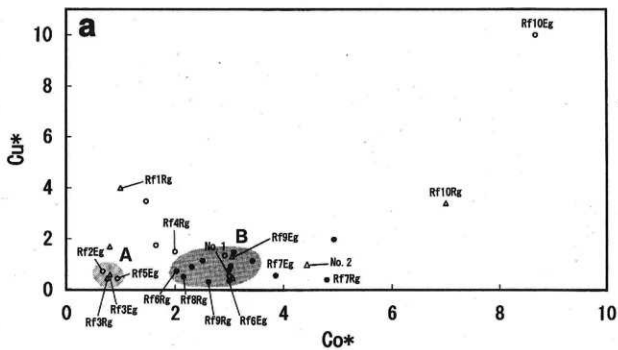


図5 No.1・No.2に含有されるCu・Ni・Co三成分比

No, Rf は表1、表3に対応。

Cu^* : (mass%Cu) / (mass%Ni)、 Co^* : (mass%Co) / (mass%Ni)、 Cu^{**} : (mass%Cu) / (mass%Co)、 Ni^{**} : (mass%Ni) / (mass%Co)。

●: 非金属介在物中に鉄タン酸化物が見出された試料、○: 非金属介在物中に鉄タン酸化物が見出されなかった試料、
△: 非金属介在物が見出されなかった試料。



7次調査全景



8次調査全景



9次調査全景



RA001
豎穴住居跡
土層断面

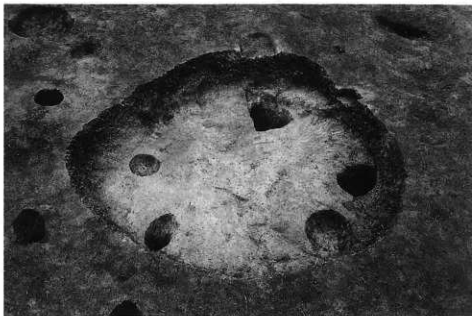


RA001
豎穴住居跡全景



RA002
豎穴住居跡
土層断面

RA002
豎穴住居跡全景

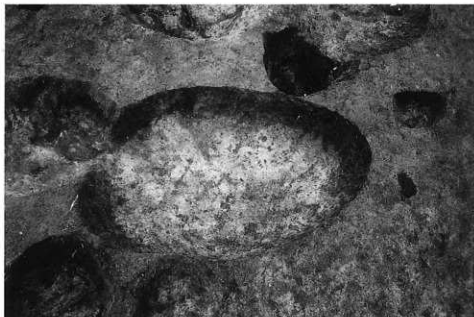


RD021
土坑全景



RD025
土坑全景





RD028
土坑全景



RD029
土坑全景

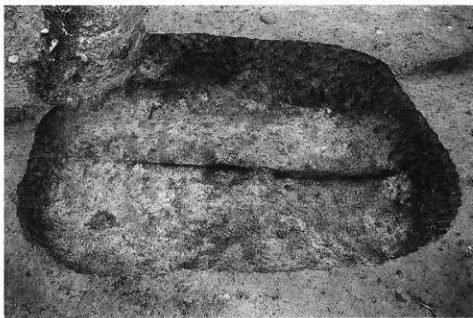


RD030
土坑全景

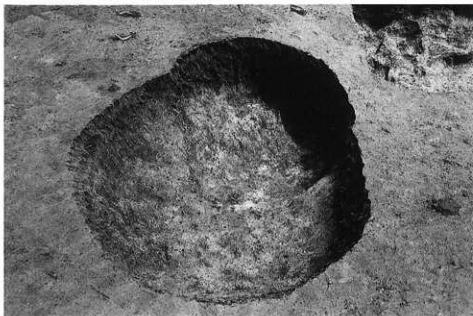
RD036
土坑全景



RD504
土坑全景



RD506 · 510
土坑全景





RX001
古墳全景
(底面)



RX001
古墳主体部全景
(底面)



RX001
古墳主体部内木棺
土層断面

RX001
古墳主体部内木棺
鉄製品出土状況

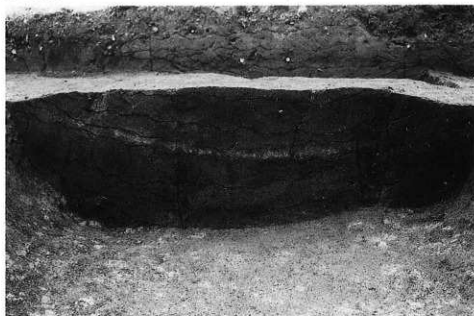


RX001
古墳主体部
土層断面



RX001
古墳主体部
構築土層断面





FX001
古墳周溝
ベルト①
土層断面



FX001
古墳周溝
ベルト②
土層断面



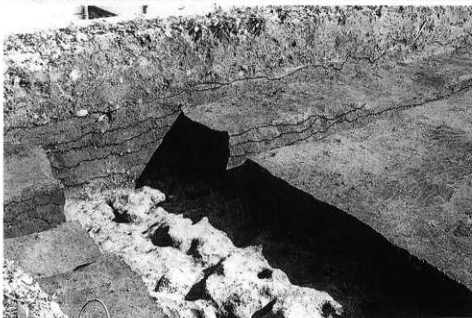
FX001
古墳周溝
ベルト③
土層断面



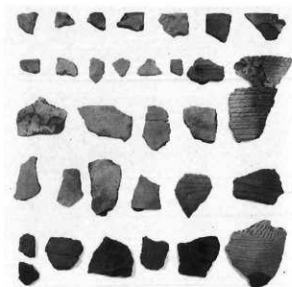
RX001
古墳全景
(構築土除去後)



RX001
古墳主体部全景
(構築土除去後)



RX001
周溝内側
土層断面



7-9次調査 遺物包含層 出土石器 (1)



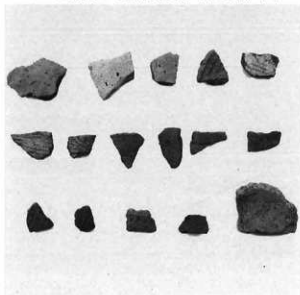
7-9次調査 遺物包含層 出土石器 (2)



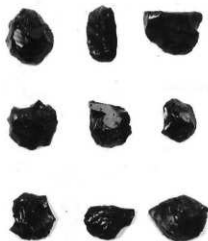
7-9次調査 遺物包含層 出土石器 (1)



7-9次調査 遺物包含層 出土石器 (2)



10次調査 遺物包含層 出土石器



7-9次調査 遺物包含層 (古代) 出土石器



RX001
古墳出土土器

RX001
古墳主体部
出土遺物



左：玉 右：針

鉄鏃



直刀

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん								
書名	「盛岡市内遺跡群」								
副書名	平成17年度発掘調査報告								
編著者名	松川光海・室野秀文・他								
編集機関	盛岡市 遺跡の学び館								
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL019-635-6605								
発行年月日	2006/3/31								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
しゅくだいせき 宿田遺跡	いわてけんもりおかしせんくわん 岩手県盛岡市前九年 いちじょうの 一丁目121-2・121- 5の一部	3201	市町村	遺跡番号	39° 42′ 46″	141° 07′ 33″	第7次 2005.04.18～ 2005.07.30	220	個人住宅建設
しゅくだいせき 宿田遺跡	いわてけんもりおかしせんくわん 岩手県盛岡市前九年 いちじょうの 一丁目121-2 他				39° 40′ 47″	141° 07′ 34″	第8次 2005.04.18～ 2005.07.30	135	個人住宅建設
しゅくだいせき 宿田遺跡	いわてけんもりおかしせんくわん 岩手県盛岡市前九年 いちじょうの 一丁目121-2				39° 42′ 46″	141° 07′ 33″	第9次 2005.04.18～ 2005.07.30	89	個人住宅建設
しゅくだいせき 宿田遺跡	いわてけんもりおかしせんくわん 岩手県盛岡市前九年 いちじょうの 二丁目105-5				39° 42′ 51″	141° 07′ 33″	第10次 2005.04.18～ 2005.05.13	143	個人住宅建設
おほだてぐらうじせき 大館町遺跡	いわてけんもりおかしだいしんちやう 岩手県盛岡市大新町 いちじょう 209-3の一部				39° 42′ 48″	141° 07′ 03″	第77次補足 2005.11.28～ 2005.12.21	570	内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
宿田遺跡 第7次	集落跡・古墳	縄文時代	堅穴住居跡 2 土坑11 遺物包含層		縄文早期～前期初頭 土器・石器				
		古代	古墳1 土坑4 溝跡3		土師器・直刀・鉄鏃・ 針?・黒曜石石器		保存状況のよい古墳 (保存措置)		
宿田遺跡 第8次	集落跡・古墳	縄文時代	土坑1 遺物包含層		縄文早期～前期初頭 土器・石器				
		古代	古墳1 (7次と同じ) 土坑2		黒曜石石器		保存状況のよい古墳 (保存措置)		
宿田遺跡 第9次	集落跡	縄文時代	土坑2 遺物包含層		縄文早期～前期初頭 土器・石器				
宿田遺跡 第10次	集落跡	縄文時代	土坑1 遺物包含層		縄文早期土器				
		弥生時代	遺物散布地		弥生後期土器				
大館町遺跡 第77次補足	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡 8 土坑7 遺物包含層		縄文中期土器・石器		集落中央広場東辺		

盛岡市内遺跡群

—平成17年度発掘調査報告—

発行 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866
盛岡市本宮字荒屋13番地1

印刷 河北印刷株式会社
〒020-0015
盛岡市本町通2-8-7